



089685-000-5

特64-697

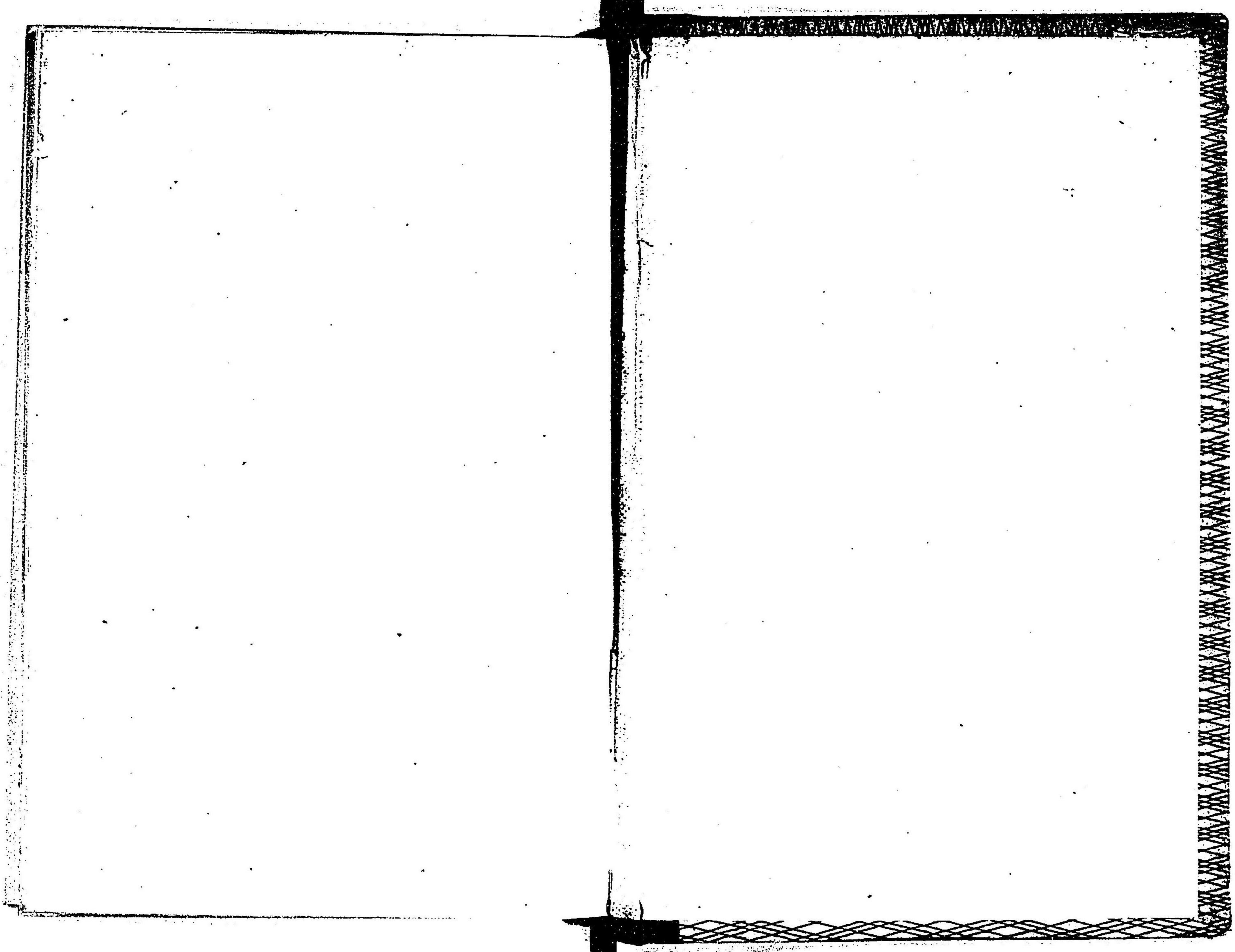
女良食用 (小三金五郎)

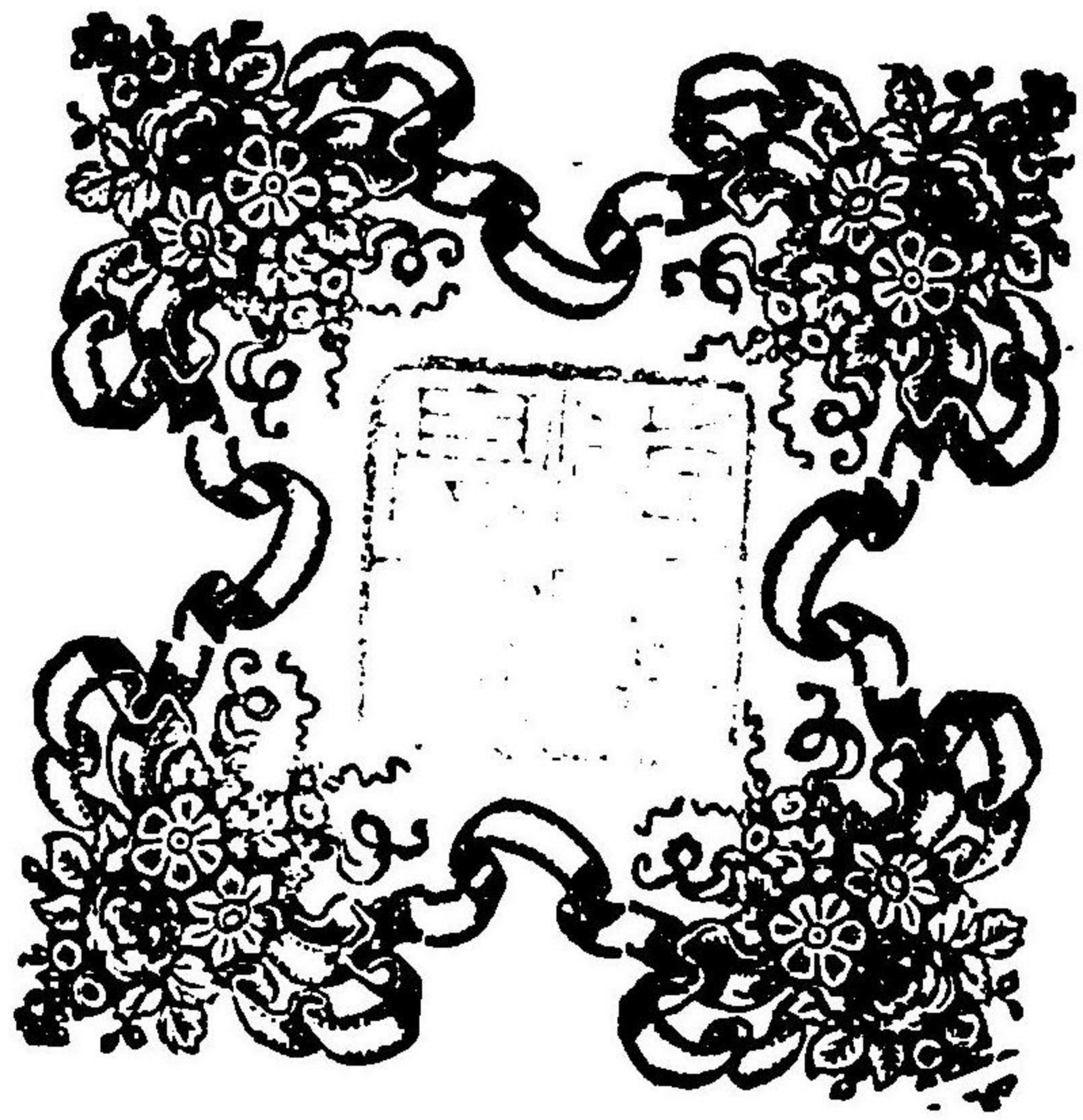
戲蝶子 / 評

M19

DBM-1983







特64

697

明

治

十

九

年

一

月

二

十

三

日

內

務

省

贈

付

翻

刻

娘

節

用

序

香

夢

亭

主

人

來

日

近

者

新

聞

雜

誌

記

稗

史

小

說

靡

然

為

風

但

今

人

不

如

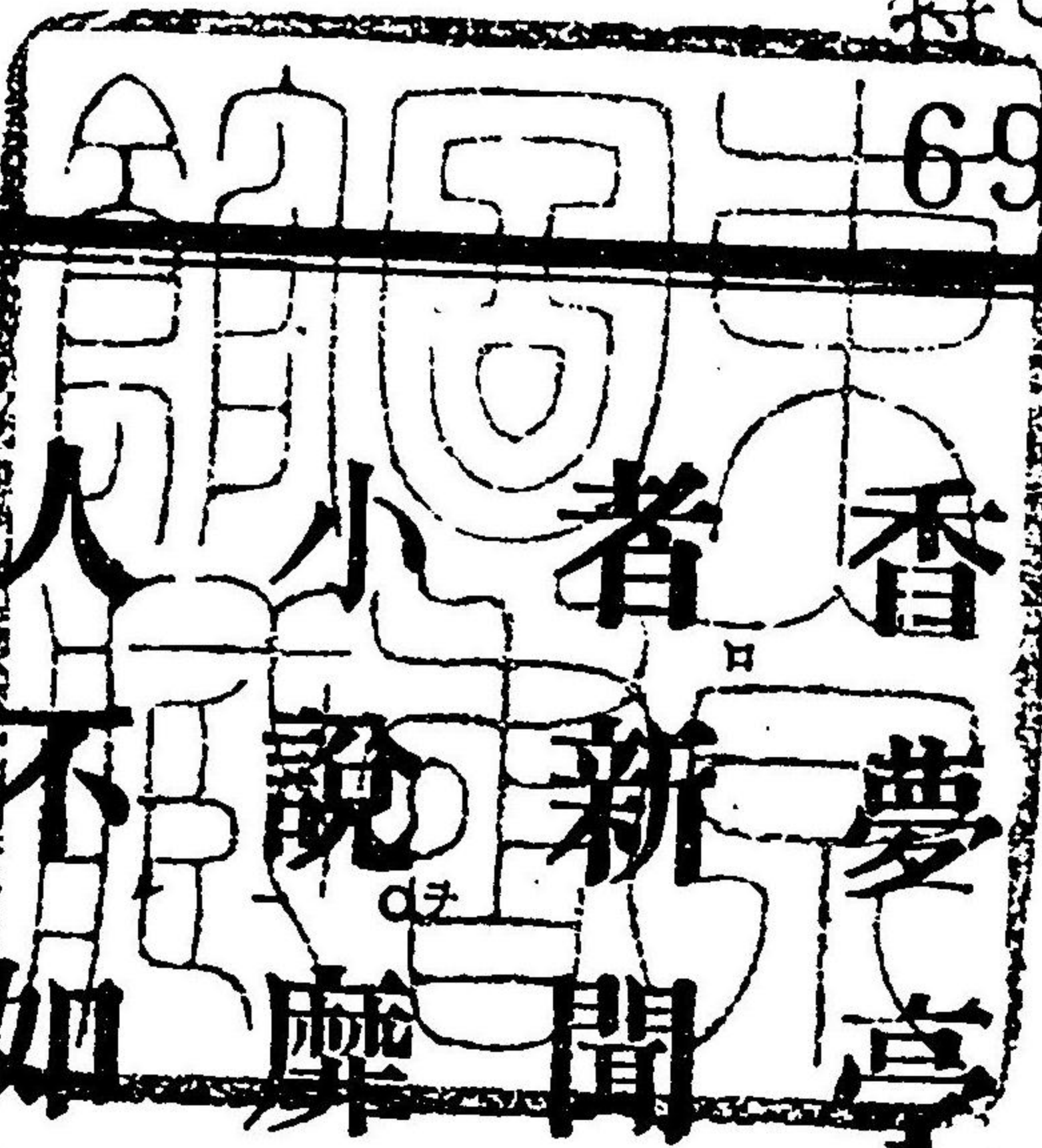
古

人

乎

何

夫



古着諷意文妙並備，
而今着淫媵疎卒哉，
此故坊間競翻刻古
着以凌夫新聞雜誌。
子以爲何。余曰可也。

主人自袖出娘節用
曰。子已以爲可。請爲
我。校之。評之。將翻刻
之也。余已稱之。可不
復可辭也。乃任其請。

及刻成書其意于卷首云爾

明治壬午初冬

香閨芳夢樓主人

そもく男女のありは八百萬の
神達の出雲の御社に群つてひて結ぶ
はに一のさまある寵の前の三介
が相摸出生のおさん殿と物置の出合
の國訛片言まどりの口説事寡婦と養
子の芋田樂喰はぬは損者のびんづる
隠居がひいろやぶりの女ぐるひある

は帯屋の長右衛門の老實として箱入
のれ半の壺へくらひ込浮名を桂川に
流せしも皆ことくを縁あるべし。こ
ゝにあらはま一部の冊子はいゝある
人の筆に稿けむ。小三金五郎が一期の
奇譚といと長々しく綴りたるを書肆
のもて来て補ひてよと需めに志とが

ひ。とこのまゝくもいさゝかこれに筆
を加へて櫻木に壽くとしはありぬ

文政十四年辛卯孟陽

江戸

文盲短齋一るす



九



八

あはれと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと



歌
妓
小
三

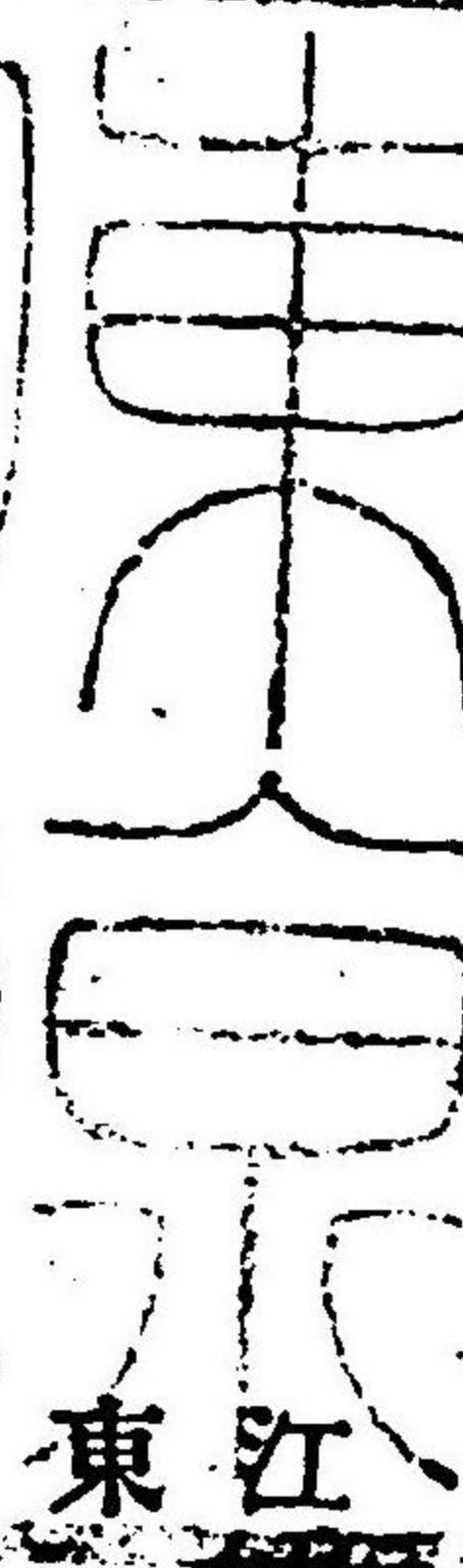
斯波の家臣
假名家金五郎



太平之
象溢ニ
紙上ニ
才筆々々



小三金五郎娘節用



江戸 曲山人 綴
東京 戯蝶子 漫評

太刀は大山石倉の。捧物に納れば長刀は冷飯の。草履ふその
名を止めたり。言は矢場のあねさんが。活業の助となれる静
けき御代ゆきになんの。新波家の藩中に假名屋文字之進と云

る者あり。二人の男子有けるが兄は文之丞といひ。弟と文次
郎と喚爲て。兩人共に文武の道を。常に勵て勤めまが兄文之

所レ謂
思案之
外ナル者

丞と何時まうに。奥勤の御側玉章と云る容貌よき女と人知
ず。契りを込て語ひし。日ふまし互ひ思ひ慕て忍く。の
密語に。玉章と云つる只あらぬ懐妊の身と也けるにぞ。此事
今にも顯なバ。迎も添事成難しと思バ二人密に語ひ。或夜
館を忍び出少しの。知己を便にして難波を指て上りつ。彼
方此方と漂泊て。思はえからぬ日を送れば。此地に居ても要
あきこと。夫より皇都へ趣て。三筋町の邊に小なる家を借て
學文劔法の指南をしつ月日を此處に送し。固より其技に勝
れれば。僅の内に弟子の夥多付て繁昌まければ。自ら金銀

藝助
身者

大立者
初出
舞臺

花有
風月有
雲

の融通も宜れを。些宛の金を人に貸など而。其利を取て不足
なく。暮す程は月満て妻は安くと玉の如き男子を。産出し
ければ。名を金五郎と呼爲て。蝶よ花よとぞだつるうち満れ
バ。缺る世の習慣。妻は産後肥立ぬ上よ。悪き風を引添て醫療
手を盡と雖其驗更にあく。遂に無常の風を誘はれ。冥途の旅
も趣ぬ文之丞は便と思ふ。妻も別れて今更よ。悲道方なしと
雖。如何共爲さやうあけれを泣々野邊の送りを。爲て跡懇懃
に吊けり。かゝりし程に幼児を乳無ては養育難と。乳母をか
へ養育させ只金五郎を手の内の。玉の如くは最惜て。光陰

挿入之
文法

巨形女
指岩井
杜若初
出ニ舞
臺一

の過を數けり。茲又珠數屋町。古鐵買の六兵衛とて。夫婦
微に喜者あり。年頃子の無りしかば。常に是を深歎き神佛よ
祈し故。其信心の通じたりけん。妻は今年四十歳よりあまりて。
始て女子を儲けしかば。夫婦の喜び大方ならず。名さへ祝て
お鶴と號。愛育うち妻は再懷妊よ爲て。次の年又女子を
産ぬ。然るに今度と養生の。惡りしにや四十の上の年子の
事故自ら血心衰へ循環せざるにや。惡血さへも下兼て。後
腹の頻にかぶり。其苦の堪難と心の勞に養生叶す。遂に空し
く也よけり。茲於て六兵衛の子なきを神や佛に祈。二人まで

小人窟
スレハ茲
濫

子とせうけしに。今將思ひ掛もなく。妻は子を捨亡靈の數に
入たる身の當惑に。歎より外なかりしを。近所の者に諫ら
れ先亡禮と取納めても。納まり兼し胸の中に。とやかく思ひ
つゝくれバ貧しき生活に男の手一ツ如何して二人の子をバ
養育やうもなかりし故。心を鬼共蛇共あし。歎へきと子を捨
んのも思ふ迄に苦みて。一日くを暮去けり。然を假名屋文
之丞は傳へ聞き己の身。引比べては捨置難く。今不自由な
く暮に故。當才の子を親知すに貫ひ受て育てなば。其親の手
も少しと輕。成もやせんと入づてよ。この事を云人て妹娘を

徳不孤
ナラ他日
必ス有レ
憐

賞受名をれ龜と號け又幾許の金を六兵衛に送り。姉なる娘
を育み玉と。情ある深切に。六兵衛と切く喜び。娘が行末ふり
く頼み是より後惠れし。金を少くお鶴又添て。去家へ里に
遣し。無爲なき世を送りけり。去バ又吾妻なる。假名家が家に
と文之丞が不義爲て家出爲かバ。文字之進と憤りつ悔みつ
素より。悪からぬ悴と雖も世間の思とく上への聞へ。親の名
を出す不孝の罪打捨ても置ねど。これ等の趣き主君へ達し。
文之丞を勘當なし。弟文次郎に家督を譲り。嫁を迎へて是に
娶合せその。身は隱居名を白翁と改て暮らうち。文次郎夫

鶴爲ニ
里子是
後伏原

婦の中に。一人の女兒を儲けり是に附ても文字之進は文之
丞の事折節と。何かに附てうち案じ思ひ出つ、風かに聞に
今は花洛に住なれて。男子持て不足なく暮すと人の風便故。
案じの胸も安まりて。行くは文之丞が子を。文治郎が娘に
娶合せ家を譲ば血筋も絶すと心よ思ひ居りけり

第一回

去を月日に關守無て文之丞が一子金五郎は今年十七才れ龜
と十五の春と成しが二人共よ天性の美男美女にして華洛廣
しと雖とも類稀ある容顔は梅と櫻の艶麗競べ劣す優ぬ風情

世少
年輩宜
仔細
讀

也文之丞はこの年頃古郷を離れ遠き都に世を送る其内も二人迄子を儲け何不足なき身の上にも十年余り過しこる鎌倉の家を抜出て父の所へ便さへ。ならねばいと戀うしく。子を持つて知親の恩。報じ難きと口惜く思ふ者のら考へ見を主家の掟を破りつゝ。妻と不義して出奔せしむ。今にも詫の叶ひなべ。再び主家へ立歸る。ともあらんを行末を彼是思ひ合すにぞ。早くより金五郎よと。文學武術を教へしに。固よりさぐしき生れ故。一を聞て萬をしる。文武の才に長きを。幾程もなく上達して。今のはや金五郎は武士の道暗に。殊に和



歌連俳茶の湯插花の類ひ迄。人並くより勝れたる。よき壯士とて也にけり。れ龜もまた世に珍き發明の生れにて。文よと歌讀手習ふ道と更あり物たち縫針の技藝に優れ。琴三味線の調べさへ。最美しく何にまれ。女子の道にくらすその生立も頼母く。人の羨バウリあれバ。文之丞は何卒まで故郷の父に勘當詫て子供の顔を見せまはまど人を頼みて。熟と父白翁に詫たりけり。鎌倉にと白翁も惣領の文之丞が身の徒から家出きて。今は花洛よ相應よ文學武藝の師範しつ。不由なく暮うへよ孫迄出来しと聞つるが。如何る様に生立や

尋ねまほまど思ふ折から。人傳にて文之丞より詫言をいひ入れれば。白翁は嬉まど一方ならねバ。一旦主君へ勘當と披露せま身を容易は。許す事もならざれば其内首尾を見繕ひ。君へ願ひて出入をさせん。文通のとは苦しのらぞ又孫の金五郎と。罪をた身故幸に。文次郎に男子なれば迎ひて遣はし此方へ引取。行くは假名屋の家名を相續とする程に。支度を調へ待べしと。返事に委細を聞よりも。文之丞の大いに喜ぬが身の出入の叶はず共悴を本家へ遣のす。此上もあき事也と金五郎を近く招き。鎌倉の事委しく語り。日あら

ず迎ひの來るを待て。鎌倉表へ下るべしと聞て金五郎の今
 更に思ひ。掛なく本家を繼ひ。身の本望といひ乍ら。一人の親
 を遺しおた其上子供れ時よりして。行末互に夫婦ぞと。胸に
 思ひしお龜にも。別れんとの心憂苦。未だ枕のかひさねと。何
 かに心置ぞ共なく打解て悪からぬ。中なる物を打捨て。行と
 にやと流石未。子供育の心には。當惑するも理り也。おうめも
 此事聞しより。心細さの案じ事。とやせんかくやと思ふ内。鎌
 倉より金五郎を。迎への人の着しのが。今の別れと也。多るう
 と人目の關の忍び泣ふさぐの女子の常乍ら。いといに胸も

讀者亦
 不_レ得_ルナ
 不_レ下_ルナ
 一滴涙

ひすすれ。部屋に屏風を立廻し。衣引うつぎ打臥て。涙の暇も
 泣ばかり。折らら障子引明て。立廻したる屏風の端を折返し
 てはいる金五郎「れ龜けふのどうだ。矢張氣色が悪いのうと
 いふこへにれかめい目をみひらきにつこりわらひまくらをあげ
 「ハイ色くのとを案じま
 すと。心細くて氣が閉いでいっそ頭痛が致ますと。ほろりと
 しづく金五郎大方今度東の本家へ己が別れて行者だから
 夫で閉ぐと云のだらうママく何の兎も角も。けふの南で
 暖たかいに此様に立籠たり引冠ては猶逆上て悪いから些と
 庭でも眺めなと。しやうじをあげるおかめいやうくおき直

丹誠益
言外
使三龜
ノ愈不
レ堪レ別
トニニ

りあたたまをおさへ 金 コウおかめ。強頭痛がするなら。何ぞ
てさしうつむく
薬りでもやらうか おかめ「ハイ有難御坐ります。あんまり氣
が閉で頭が重くてなりません。うら今しがた實母散を飲まし
たヨ 金「うふか。余りつまらぬとよく思つて。ほんど
うの病氣が出と悪いから。今日うちやうと天氣のよし芝居
でも行て見ればい、れかめ「い、私ハ芝居も見たくハ
ござりません 金「ハテ困つる者だ行て見れば宜がのふ。團藏
だの璃寛だの。國五郎等が大評判で。夫に東から上つて來て
ゐる路考の門弟の路之助も又新作の流行歌を。舞臺で歌て

妙々又
妙々終
ニ妙々

三絃の手が有が。いつ見ても實に妙だヨ。ふりめ「左様でござ
いますか子。アノ去頃郎と御一所ハ浪花へ参りましたし
た時濱芝居で見ました。評判のよい。紀伊國屋ハどう致しま
した子。金「源之助が今の東都へ歸つての益。く。評判がよ
くつて。去年の春向町の芝居で。荻萱の狂言を爲が近年ハね
る大當りて夫あらなんでも當り續で。町も屋敷も紀のく
ど。べた一面に女子供も。ひいさすると上方迄専らの評判よ
おかめ「其ひいさの多い紀の國屋にも。優つゝお方がまゝ東
へお下遊。たら。マア何様でござりませう 金「紀の國屋より

斷ニ盡ス
滿天下
住人才
子ノ腸

勝手次
第之字
含ニ幾
多愛戀
之氣幾
多猜妬
之氣幾
多怨恨
之氣

好男といそりやアどまの人ぞ ふうめ「どこのお人が御存じ
で有乍ら日本から口元まで。音羽やに紀の國屋を。一ツにし
たよりよみ御容貌と學文の稽古よ御出なさる。皆様が常不
斷。さう云てお賞なさいますよ 金「なんの事だ更り解せねへ
おかめ「わうりませんかへ。郎たのとさト 又つこりわらひ
金「何と云うと思つたら己が顔の棚おろしか宜加減におひ
やるものぞ ふうめ「アレ 實でござりますヨ夫故ら私ハ。一
ばい苦勞に成まして。色くいな事を案じますと。胸が一盃よ
なりますヨ 金「なんの事たな可笑くもねへ。戯談ハ戯談ぞが

實よ余まり案じなさんな。迎ひと一所に明日の朝鎌倉へ立
て行ても。落附たら早速にお前を迎ひよよこすのら些との
内だ。待てるな併し未し。うは親父がお前と己らをば。夫婦
にするよ兼ての量見。なれど今迄遂しかに親の目を忍んだ
り。なまめいた事もしねへからそこがためへの量見一ツで
若れいらに遠ざかつて。呼によこけ夕待遠なら。縁づく共ど
う也と。夫ハマア勝手次第大方モウ東へ行から。嫌に成。時
分だらう。のふおのめゆか ふうめ「いへなんで嫌でござり
ませら。心よもないと計かり縦へ何様な處でも郎が呼でく

ございますなら私わたくしの嬉うれまらございます。郎あむたあづまの東いであそはしへれ出遊
 たら。東あづまの女中ひとの上人がら品まことが誠まことに意氣いきだとヤシます。私わたくしのや
 うなもの迎むかもモウお捨すて為なるの知して居ゐ升のぼもの末すえくの事ことを
 考かんますと。寐ねても夜よの目めも合あませず。其上そのうへ實じつの父とと様さんと。お
 顔かほさへ見みぬ其内そのうちよ。三年さんねん跡あとにお果とてあされ。跡あとに残のこるの姉あねさん様ひと獨
 り里さとに行いてお出いでなされ。嘗いつさへあふ逢あて名告なりのあひ。便たよりになつたり
 なられたり。致いたしませうと存ぞんじましたよ。其そのかひもなく里親さとあや
 に。欺たまされて身みを河竹かわたけに。お沈しづめなされしと云い事故じこ。今いまは杖つえに
 も柱はしらにも。力ちからに思おもふお御父おととさん様さん計かりすえ。末たのを頼たのみし郎あむたよまで思おもひが

又伏豚

かないこん度どのお別われ。心細こころほそい身みも也なりまし。ト いひつ、な
 んのこへバ金五郎かねごろうもそのこゝろね 何なんの事ことな。其その様さまに末すえの
 とおもひやりつゝむねなでなるし 未迄すえまでを。案あんじるのら氣きが閉よぐ成程なるほど兩りゆう親おやに早はやく別わかれ姉あねさん様さま迄まで
 生別うまわかれて。心細こころほそいも尤もつともが。人間にんげんの老少ろうせう不定ふじやうさだめないの
 が世よの習ならひ。命計いのちをかりの神佛かみほとけの、力ちからづくでも行ゆぬの。皆定みなままれ
 る身みの宿世しゆくせ。夫それをよくく氣きにして役やくにも立たぬ事ことやア
 ねへり。又また縦たてへ別わかれく。遠とほく隔へだつて行ゆバとて。おめへにこ
 の家いへを讓ゆづりでもすると。せひ壻むこを取とねバならぬが。さう云い時とき
 のママとらする心こころだ。おめ 「そりやアモウあなごがみつし

やらすとも海より山より御恩の深いおとつさんのおつしや
 るとの背く心いござりませんが此事計りの背きまはれたとへ
 妹脊の御許しを受ず共あなたを除て余の人に添ます心いご
 ざりませんあなたが東へ御下り遊て問音信もござりません
 と私ゝの時と逆も生て居ません死ぬる心でござりま
 す 金「馬鹿などをいひなそれいほんは短氣といふ者死位へ
 なら何も苦勞をするにも當らず。添たいと思へばこそ。色々
 と氣をもむじやねへう。ほんにわるいといふねえのら。少し
 のうち辛抱して便りを送るのを待てるな。コレサ
 ね龜なせ

他時逃
走伏
脈

そんなに泣なさる子供かなんどのやうに別れて一生逢ぬと
 いふじやアなし。ちつと。氣をしつかり持なト いとるはほ
 うれしさりなし「あなたがそんなにとを分て。やさしくれつ
 さやるせなく しやつてくださるやど猶悲しくなります考がへて見れば
 見ます程しきりに心細くなりましてあなたがお宿お御出遊
 ばもうち寧ろ死でしまいで成ましまト 金五郎のひざにとり
 くみわ 金「エ、御前もマア心の弱なんぞといふと死くと
 けて 譯も無其線言マアよく物を積つて見なこんなと云と年寄め
 くが今世の中が静だからよけれ昔の乱世の時で見な何程己

不レ失
丈夫之
氣

らの様なちよろつゝの者でも武士の種だから軍の處へ是非出
 掛なきやアならぬは。宜の出来れば敵の首を取るやう。こちら
 の首ととらるゝやうに二ツに一ツ命づけ親を捨子を捨て戰場
 へ出るの武士の習慣よ昔と今と比て見な實は樂なこの世の
 中そんな危い狂言もあく武士の身に取ては本意じや無れど
 實に今の極樂世界此の道理を考へると三年や五年遠ざりつ
 て苦にもする程のことも無がそこが矢張自己勝手に十分で
 も不足と思ひ。人情の當めへさの夫故必ずとも。さなく思
 ず時節を待たよ短氣を出した其後の後悔しても始らばへか

起 遙 應 筆

ら心を大きく持が宜よト。としわのなれど金五郎さがしさと
 女さ「若旦那様へ旦那様が一寸と入つしやいましたト。云に
 金五郎のナイ〜トお龜の部屋を出てゆく。父文之丞の一
 間の裏に。煙草烟らし文讀る。金五郎の靜かに。父の側へに
 かしこまる。文「ナ、金五郎か。扱モウ鎌倉へ下るのも明日な
 れバ旅の調度を落なく用意するが宜ぞや夫は附てくどく
 といひ。聞す迄もあけれど。獅子の我子を谷へ投。其生立を見
 て安堵して手はあすど。焼野の雉子夜の鶴子故に迷ふの親
 の常。鳥獸でさへ其やうなるを。況て人間の猶更に。子を見る



自是レ
聖人ノ
言

と親に及おやししかかたごへからきしんく譬たとへ高貴たかき縉紳しんしんをはおぢめめ稻荊いな漁り下くださま迄まで。子こを思おもふのの企おこじと。最も早はやそちもも十八じゅうはちなればあんん察しる程のと無なが。うう云いての異いな者あれど。人ひと並ならんより文ぶん武ぶの道も秀れどと云いふの無ながマアの様やうな人中なかへ。出でてもまんざら恥數かずも無なし。云いふて己おのが智に誇り藝に慢じて多くの人ひとを眼下がんかに見下みてのならぬぞや。又また一ひとツにの祖父おぢいさま様さまを大事だいじと掛。我われに代て孝行かうかうして呉。一ひとツにの弟文ぶん次じ郎らうの養父やうふと雖も首方うでかたが爲に云いふと知る血筋ちぢんの叔父おぢい故こ。随ま分ぶん共ともに心よ反。これ又孝かう行かうせよやならぬぞ又鎌かまくら倉くらの繁華はんかの土地ち故こ人ひと氣きが都と違ふうらよく風ふう

遙_ニ伏_下ス
金五遇
阿鶴_一
之段_上

俗を吞込よ。仲間の付合其外も。時宜に依ての不得止ならぬ物。物事万内ばよして花よ誘われ月に浮れて女郎買等も三度に一度のつづされなげりやア行が宜いさ去年ら。傾城傾國の譬へも有べ必ず深くのまらぬやう。心を乱しちやならぬぞ。忠孝に心を勵めば其身の末も悪うらねど兎角に酒色に染り易く。昔しより名將勇士も。色に迷ひ酒に溺れて大切の身を亡ぼす例しもまゝ。有と故此道の深くはまらざる慎めよ。こゝが常言の恥をらねば理が知ぬと云通り早い例しに此おれが。若氣の至りと云乍ら。無分別な心から親を捨古

此邊
文字
世書
生輩
宜書
神

郷を離れ。家出なして暫時うち住居も定めを漂泊しが。親の身での不孝な子でも。悪し罰當れとい思ひぬにや茲に住居を定めてから。仕合と不自由なく暑さ寒さの難義もせせ。人並くよ世を送る。今此暮しも浪くの。日かげ者の望みの無れば不孝の罪なりや何様に。今更悔でも後への回らず。サこの道理をよく辨へて。女色其外悪きことへの遠さかるやうにするがよ。今度汝が我本家へ貰われ行て御主君へ事とい最目出度。我身の喜此上なし又れ龜の小時より。汝に此家を譲りなば娶合して夫婦に仕やうと思ふて居た

親心、子不、知是世、上通體、也子、心親不、知者、金五、謂也

れ共。本家へ行ハ何として。我手で育てし娘でも氏索性といひ弟の手前賤しい娘の妻に成まい殊に約束の盃を爲たと云中でのなし汝を彼地へ下した上ね龜に智取て此家を譲らば我又外に樂望みもなければ必ずともに今の教訓忘れていならぬぞやトわが身のと世の事を交へて諭言の葉の始め終りを金五郎委細に聞て胸に疊そ。ありがたき泪と別れのなみづつどのみこみ一段くと事を分て。お心深き御教訓さつと骨身に答へまして。有難ふござります固より愚かな私なれど。心の及びます丈の忠孝二ツを勵みます。尊体も

随分ね身の上を侈大切に御養生なされお健にお暮成れて下さりまして。まどやうなる文「イヤ夫の格別お龜も汝と同やうに。小さい時から共に育ちて。兄妹同様に暮したから今別るゝも悲のろろ。是も定まる約束事無分別の出ぬやうに。よく暇ごひしたがいト粹も甘いも噛分た。とばを鹽に金五郎の父の前を退ぞきて己が部屋へ入り。翌日出立のとなれば。何くれ彼くれ夫くに旅の準備を落も。なく調のへて夕餉をままひ。揚じを用ひ乍らお龜の部屋へ私と來り金一とらごお龜些どの氣色が直つゝか。おかめ「ハイ何ぞかどうも

人々有
理々甚
有リ理

塞ふさぎついでに矢張頭痛やつをむづつらが致いたします。ア、阿郎あしたはどうでも明日あしたの朝あさに立遊かたあそぶのでござりますか。金かね「さうさモウ迎むかひが來きて居ゐるら。どうも延のびされもしねへのさ夫それだのらおめへの。顔かほを見るみるのも今夜こんや限り故せ。忘れぬため見納みまめに能見よくみて置おふと思おもつて來きたよト笑わひながら顔かほを見みれば。お龜かめの恥ちしげに顔かほを赤あかめられため「又またそんな虚言うそをり。夫それのはんの氣休きやすで御ござりませう金かね「さうさ何れ我輩わがらの云いふことゝ虚言うそのふ。何なんでモウ明日あしたから。居ゐねへのごから本當ほんとうにやアしねへ等とつ先刻さつお父上とうさんの云いふな。居ゐつたとをお嬢めいも大方おほ聞きたらうが我輩わがらが行いた其跡そのあとでお龜かめ

愛慕極
時自
生三嫉
妬之言

に才子さいしを取とつて。やつて此家こゝを讓ゆづと被仰おつしやつたヨ。のふ若もし其聲そのこゑが色男いろをとこなら。首くびつ丈たけのまり込こんで。我等われらのやうな者ものの後うしろ向むきで唾つばきどらうお龜かめ「なんのママもつたいない。夢ゆめにもそんな心こゝろの持もたせせん縦たどへ業平あまのひら様が生うまれ代かつて参まりましても私わたくしの阿郎あまたに見返みかへる心こゝろの爪つめの垢程あかほどもござりませぬヨ 金かね「宜い加減かげんな言ことをいふ。見變みかへる心こゝろの富士ふじの山やまほど有あたらうおめ「モウ、阿郎あまた郎らのなせ其様そのやうに私わたくしが申ますこと。お疑うたがひ遊あそばすへ 金かね「疑うたがやアしねいけれど。虚うそらし云い様やうだから。夫それが信實しんじつまとなら必かなず短氣たんきを出ださねへで。便たりをするのを待まつてゐなよト背せをさす

到レテ此ニ
不レ泣カ
者ハ非
有也

ればね龜の嬉敷 おかめ「私の何様にも。待ておる氣でござり
ますから。何卒さつとお便りを早くなすつて下さりましと
互ひに盡ぬ名残の泪。さとしうらさもまぶしうぬ。明の鳥の
鳴くもお龜の金五郎が支度する。傍へに持ものなを取揃
へるうち。用意とくく整ひしるのばいざ出立とさ。いめくを
金五郎の流石にも跡に心の残れども詮方なければ氣を取直
し父とお龜に別れをつげて。迎ひの者と諸共に心強もさび
立を今が名残と文之丞ね龜も共に門邊まで送り出つ。金五
郎の蔭見ゆる迄見送れば彼方も見返る別れの泪。互に胸の

憂也 龜に隠れて姿と見ぬす也ぬ

第二回

左然程に。お龜の金五郎が鎌倉へ下りし後。いと心もむ
すばれて兎角浮立事もなく今日や便の有もやせんあすや音
信有んのと空に追日を指をり數へ一日くど暮すうち早く
も半年余りも追て彌生の末に成にけりされどいかなる事に
や有けん金五郎の方より音信の文さへ來ねば一入にお龜の
思ひいや益て風に聞バ鎌倉にいれ雪といへる娘有て行く
の金五郎に娶合する約束なるよし聞て猶更胸つぶきさうと

愈思テ
愈切ニ
切ニ而シテ
終ニ至ル
亂レ心ヲ

の知ずしてうかくと便たよりの文ふみを樂たのしみに待まちし心の愚おろかさよ殊こと
に妹脊いもせの語かたひもせぬ中なかなれば中なかくにいつの世よよか添そと事こと
ならずと云いて今更いま他外ほかの男おとこ持氣もちきのさらくなく今いまの日頃ひごろ
の樂たのしみの甲斐かひさへ泣なみて暮くのかと思おもへの千々ち々に胸むね苦くるしくある
にもあらぬせつなさを父文ちちのふみ之丞のぢやうにも語かたられず獨ひとり心こころを痛いた
しが只ただ其事そのことのみ思おもふ者ものから浮うか々と床病とこやみの朝あさな夕ゆふなの食事しょくじ
さへろくく進ままに打臥うちふしぬれと元もとより妬ねたむ。心無こころをけれバ味氣あじき
なき世よと打うちかこち。一日ひとひ二日ふたひと送おくれども。夜よの目めも合あひで案あん
じ事こと。行末ゆくすゑ過方かたがた思おもふて見みれば。宜よろこ々と幸さいなき生うれにて親おやにの後あと

疑心ニ生ス
暗鬼一

れ姉あねには別わかれ便たよりさへなき。身みの因果いんぐわ心の願ねがひも叶かねバ生いな
がらへても。樂たのしからにぞ寧いづ々と淵川ふちがわへ身みを沈しづめて。果こなんとまを増まし
ならめと戀こひに心こころも乱みだれ髪かみ。なで揚あぐる氣きもなのくに。泣なみつた
る閨ねやの戸とを。更よ行ゆく夜半よなの風かぜならではとくと。打うち鼓たたき。お龜かめ々
々と呼聲よこしに。驚おどされて立揚たちあり。そつと戸とをあけ伺うかがへる。人ひとも非あら
ねバ扱さてハ我心わがこころの迷まよひに風かぜの音おとを若もしや戀こひしき其人そのひとの來玉きたたまひし
どや思おもひし故ゆゑ。わな淺猿あさましき心哉こころかと。我身わがみの程ほどを願かへりて又打またうち
臥ふすに再また三度さんどお龜かめくと。いふ聲こゑの。耳みみに入いるを訝いよかしく
若もしやと感あはて出でて見みれば影かげさへもなし打臥うちふせば又呼聲よこしのする

故にお龜の夢か現かど。其感さへ解け難く心亂て立たり。居さりこの長生ても添ねば思ひあきらめ死ねうしと。父母の呼給ふならんナ。夫くと娘氣のよしなき迷に引されて死する覺悟で裾とし折。幸ひ誰も見しらぬ様すと。裏口より抜出ていづくとも無急を行ぬ。其明の朝れ龜の居ざるを見附て文之丞家内の男女も驚て。其處此處と探せども。その行方知ざりければ文之丞は。熟くと思ふに。日頃より金五郎を夫の如く思ひ思われ。互に悪からぬ中也しを。嘗別れし其日より只うつらくとして。東の空耳打詠め娘心に

落筆

已云レフ
無三死
骸一暗
伏ニ他
日ノ出
現一フ

添れぬ事と思ふ餘の胸に絶せや夜も折くうなされてい淵川へなど身を沈めんと現の如く云々るが。儲も入氷やなしたりけんと猶人を出し水邊を。落なく尋ね探しければ。その死骸さへしれざれば今い文之丞も定業ならんと漸あきらめ家出せし日を忌日として七日くの訪ひ吊も丁寧に涙乍にいとなみつ。文之丞の此事を委く状に認て鎌倉の金五郎方へ人を下して知らせけり。されば又金五郎の本家の叔父文次郎の家へ養子に貰れ來りけるが思さやれ雪と云て容貌の美さの娘有に驚しが今更に詮方なく。父の教に

隨したがつて養父母やうふぼに孝かうを盡つくし。暮くす内うちも都みやこに遺のこせし。お龜かめのとの
 み氣きに掛かり末すへの女夫めうとと約束やくそくして別わかれて此地このちに落着おちつきしなら便
 りをなして呼迎よびむかへんと。思おもひしとも齟齬そご。ね雪ゆきの有あれべ此方こなたの
 父ちちに。お龜かめのとを打明うちあけて迎むかへたし共ともいひ難がたく。殊ことに實父じつふ文之
 丞じやうが。お龜かめの素生すじやうも賤いやしければ本家ほんけの嫁よめに成難なりがたしといひた
 る言ことの彼是かれこれを。思おもひ合あせば行ゆくくの迎むかへも。ね龜かめと添そふ事ことなり
 ず。一旦いちたん約束やくそくしたれ共ともりゝる譯故わけゆへ思おもひ切きれと言いひ送おくらんも。流石さすが
 にて。又遠またとほざりりゝるとならばなま中使ちゆうかたりをするなれば思おもひ
 の種たねをいや益道理えきだうり音信おんじゆんせぬこそ互たがひの爲ためいつか忘わするゝ事ことも

他日たにち遊あそび
 近ちかし
 疑うたがひ
 龜かめ
 伏ふ

あらんどあきらめてゝ見る者ものの愛敬あいけい附つて惡にくらぬお龜かめを今
 更余さらの人の。手活ていけの花はなに爲なすとも最口惜いしくつきと也なりと。日ひ々に胸むねの
 み苦くるしめけり。ゝゝる所ところに實父じつふの方かたよりしゝのゝの事ことによ
 りお龜かめが家出いへてし行方知ゆくへしずといひ來こければ金五郎かねごろうの驚おどと大
 かゝならず掌中てのちゆうの玉たまを失うしなひし心地こころにあたれ胸むねつふれ氣拔きぬと
 る迄まで惑まどひしが。流石男りうせきおとこのとなれば漸やうやくに心取直こころとぢし。熟つくく思おも
 へば縁えんなき昔むかしとあきらめてゝ見るものゝ若わやお龜かめの心變こころかへ
 我われのみ深こく思おもひゝるもしらずに男おとこを拵しらへて家出いへせしにいあ
 らざるり又またの狭せまき心こころから偶ふれぬとを。くくに病やまて。入水いりづいなぞせ

しにやト様さまづくに思おもひ取とりて心こころに回ま向かうしたりけり。是これより後あと
 の金きん五ご郎らうもお龜かめが死しせしと思おもふ者ものから。家いへの娘むすめれ雪ゆきの姿すがたも
 十じゅう人にん並ならに勝すぐれれど。見み代かへる心こころもななら故ゆへに世よに。樂たのしきこと
 なく。おもしろからぬ日ひを過すび中うち夏なつ去さり秋あきも文ふみづき月のなかつた。中旬なかつたに
 至いたれど暑あつさの去さず。或あるひ日ひ金きん五ご郎らうの。醉すい狂きやうといふ友とも達たちに誘おほて大おほ
 磯いその燈とうちう籠ろうを見物けんぶつせん。うち連つれて黃たそがれ昏くれより廊くろせへ至いたり昵あじみの。茶ちや
 や守も田た屋やへ行ゆて酒しゆえん宴えんをまふけ歌うた妓い牽ひ頭たいなんど相あ手てにしてさ
 いめささたつて大おほ噪さわぎ。いいこももち。ホ吉よきち「コウこウうくを用たさ
 んくくコレサお用た嬢ぢやう一寸いちじゆん此こ方かたを向む玉たまへむししやちにひけが



たらアノ嫌だヨよしてお呉。其様に引張ど着物が切ハ手好へのふへぼ助「チヤキサガ附へ勘忍してお呉よふッ。ヨウた尻さ
 んいノ子ヅ柄一寸後を向てれ呉無類飛切大極上糶卸賣仕
 すと云聲色を仕のらお尻「チヤノ奇な薬のいひ立どね」菊
 のどらりのもとよりもたいまらの袖やりゆるらんへが「ま
 めまするハエヘン〜エヘン。エヘン。エヘン〜。エヘ
 エヘンノエヘン〜〜〜目八「何〜〜。コレどふ
 したのぶそこへ小間物見世を出しちやア眞平どよへが「な
 せ〜こりやア聲色ど目八「エヘン〜。エヘンノヘンッ何

の事たへが「ハテやななどを聞給ふな。よく考て御覽じろ
 則ち咳が三十ろウサの酔狂「れさやアがれアハハハハ、目
 八「モン旦那妙な事がどせへます誠にとらもどらも眞に。實
 に妙く妙でどせへす酔「なんど騒しい何を云のだ目八「イ
 エサあなたぶ誠にとらも酔「我がどらした。女が惚るで羨
 しいか目八「さかなこつても御挨拶チホハ、ウ。エモシおめ
 へさんはた目がニッ有てよく見ぬ升ね。實にうらめーいた
 アこの事た酔「ハハ、何を云かと思たら足下ハ目が一ッど
 つけの。惜い男たがあつら玉に疵たのふへが吉「左様さね


へ。モシ旦那よく覽まし顔の丸み鹽梅肉合なんどの。てもなく珊瑚珠の緒の再來。モシ鼻筋が横の方へぐつと通つて。眉毛がによつくりと、やうくじ 凝やうの様で。鼻の獅々でもねへが赤くひかれて口の錢湯の柘榴口なぐ。流し男の給金の安いか。さて。齒の一向に磨上ぎ匂ひの悪事言ん方なし。譬て言ば名く方々の。寄合世帯といふ顔がまへサア嘆しいが愛敬のねへ。女縁のなさそうな御面想ごめんそうぞ。目八「こそく貴様何の遺恨が有て。己が顔の柵卸しを爲るのだ。隣りの寶を數るやうに。人の疝氣を頭痛に病むといふ余程お前も苦勞性

せよ。ア、兎角男の好者と嫉ねたまるので五月蠅うるさいぞ。チホンくへが「へんをつう止たがる奴だのヨウ戯談あそびいおどろぐが足下齋間かたひこまをさらけ停ねへいか。金まうけの筋すぢが有せ。九月にあると目八あせくへば「よく考て見さつし容貌かほかたちと云口前くちまへと言目八「ハテナ富でも取と云とかノへば「へん押の強へ神明の祭りまつりぐからよ。目八「ナニく神明の祭りまつりフウ眇めづかち生姜しやうがか。ヤいまくまいとをぬかまやアがる。コレ其様に難非なんひを付て悪く云ても。是これでも女おんなにやア憎にくがられぬへ男おとこだよへば「その代り可愛れたとも有めへ。その顔つらぢやア。目八「嫉ねたく顔かほにや

自_リ燈籠見_レ物_ニ至_レ此_ニ如_ク開_レ文_字而_レ不_レ開_レ文_字

迷ぬ姿にや戀とへが「フウウつた一ツの目に惚るフハ、
、おたこ「ナヤ〜目八さん今日の誠に閉口だね〜目八
「ナヨサ〜こんな理も非も弁へねへ。田夫野人と論の無益
だへが「ナヨれれが田夫野人なら。足下と牛房蘿蔔だ
〜「ハ、ハ、ハ、目八「時にモシ金さんと被仰まし〜子ちよ
いと一ツ厭じ天皇秋の田れと致しませう 金五郎「こりやア
一ツお押へ〜目八「ナル。そこもあれバ蓋もあるガモシ且
那實に妙と云とごのせ履ますトいふ來歴。モシ千年屋の
抱の子で此頃迄引込で居ましたのが。けふ突出しの眞名鶴

是_レ金聖_ノ嘆_ハ所_レ謂_ハ月_ノ度_ニ廻_レ廓_ニ法

と云て打附ひ  だのお職しやくさ子。其容貌と云バ。天人の羽衣を
冠り辨天様と冠を落し。拙者がお宿れ山の神も尻を捲て逃
出す計へが「へんがうぎに山の神を尊あがめの目八「大きに。ス。
エ、と先此天盃と其方の旦那へ差上で置のト。そこでモシ
旦那。今にモシこ、へ眞名鶴さんの参まゐますから宜よろを拜おがみな
せへ。實に恟驚おぬらち鼠こつこと千話の始まり。とらつ
こつこの鶏よ。鳩つばつばにや豆をやれすてつばらに
油断ゆだんをするな。太へ奴なら打のめせ。じたい我輩と都の生れ
色いろにそやされこんな帯間たすこになられたア。ハアとんどこぞん。

どんぞとどん。ツア、せつね、らさがはづむアツハツハ、
 酔狂「エ、噪宜くしやべるぞ其様にどなると天井
 の煤が神事舞をして。疊の芥が踊り出とぐらう。目八「違へど
 せせん。酒香猪口がさやりをむつて銚子の引物を引出すと。
 吸物膳の箸がつ、立て。硯蓋のくじいをおつ敬しやせう。
 飛ぶ化物屋敷のやうぞ。アハ、ハ、ハ、日那戯談の除てモシ
 樽を爲を影ぢやアねい。正真正銘本家元祖まじり無。外入文
 字でしよなりくアレくあの挑灯ぐとで御せへます。酔
 「はんにのふ金様お前もよく目利をして。若無疵が氣に入ら

讀者も
 亦有下
 與ニ金
 五郎一
 一ノ心

ら今夜の花にしなざるがい、金五郎「違へねへ何ならお前
 どもやいにしやうト おどけをぬふうち千年やのつき出し女
 郎まな鶴の新造かひろを引つれてゆら
 くとせんとあもみくるを金五郎のしとみ お龜の姿に生うつ
 を定めてみればふしぎやもくゑのしれぬ
 し。若や夫かど熟く見れを劣りいせねど何處やらぶ。違ふ
 様よの思ひれても日本口本愛敬のある品形の宜似たれを。
 胸驚て心惑ひ我身の迷ひか酔ふる故かど。暫時見とれて
 詞なきを。見て取帮間酔狂も 金五郎のかたをた 酔「ユウ金
 さん。お前の此頃ひとく物案じな様子ぶら。色くく進め
 ても女郎も藝者も地者も嫌だと。だいつ子がすねるやうに。

嫌だ、と云なすつたが。なんと今の花魁のさうぶエ 金
 「さうぶエ中く美しくしらす 醉」余程誘ふ水あらむぞす 金
 「ナユさうぶ理屈でもねへけれと 醉」けれどが可笑。強氣が
 ないでも有めへ 金「ハ、ハ、ハ、マアなんでも宜から私しや
 アあの子にさめやう 醉」夫がい、夫がい、左様ら我も行って
 誰ぞ見立やうト二人共 千年やへをどりこみ お定りの盃事も
 程よく切あげ床へ回へ 藝者幫間の御機嫌よふト みなくど
 金五郎の初會の事故羽織の枕元にぬぎ捨て。横に爲て寐
 て居處へ合方の眞名鶴の。藍御納戸の唐縮緬裾よ光臨の鶴

美人 自天 上下

の染出し緋縮緬の裏襟附し。單へ物に對丈の襦袢。黒の紋天
 お緋のころ蝠輪の腹合せの帯をメなく結鼻紙を持添て裾
 をどり いろくしながら金五郎のそばへさ 眞名鶴「若へモ
 ナれ臥みなんしたかへ。なせ起てゐてれくんなんせぬへサ
 ア目をお覺しなんしト ぬすりたおせむ金五郎とわ 金「チヤ
 花魁いつの間にマア來なとつた來なら來ると前びるあ一寸
 人でもよこしおさればい、出し抜に起されちやア虫の動じ
 るから ままづる 「チヤく嫌でをすよ 金「さうぶさうす何れ
 私しの様な瓢箪の。可愛がられぬへのとあたりめへさ さま

西廂記張生向法本旋請幅
廂 張 生 向 法 本 旋 請 幅
廂 張 生 向 法 本 旋 請 幅

づる「アレさうじやアおどろいせん。お氣は障つたられ許し
まんしトたばこをすいつけて出す「これの御馳走トまなづ
たし顔をしげ「チヤなんざんすへ。主やアなせ其様に顔計
り見なんすへ。主にそんなに見られへまこと。恥敷なりいば
トにっこり金「オヤ誠に不思議どうも生うつし此様は宜似
る者のトそれをわすれまなづる「チヤなんでおすへ似いし
たといそりやア誰さんに似いしたへト 顔をつくく金
ソレその笑ふ顔つきから物でし恰好似たとい愚か爪を二ツ
み割すと其儘まなづる「チホ、、、、ばりらまうおすヨ似

眞名鶴不此知場事讀者亦不
眞 名 鶴 不 此 知 場 事 讀 者 亦 不
眞 名 鶴 不 此 知 場 事 讀 者 亦 不

たにたど仰せへはが。誰に似やこのか。話てお聞せあんしな
金「話しませうく。その似と云子細のママ聞てお呉斯い
ふ譯さ。私しが幼い時分から行末かけて交言て女房おせう
と思つゝ女にサ。誠に野暮の野郎ごと笑つてくんなんさんな
まなづる「なんのママ笑いんせう。そんならモウぬしの御新
造さんがねざりいすナ金「ナニサその女のモウ既お死で仕
舞たのサつる「妄言。うんなに隠しなんせまといじやア
おつせんかへ金「妄言じやアなしサ。實お死で仕舞よつる
「ほんざんすのへ。ソリヤアマアさぞお力がお落なんしたら

ラ子譬又虚欺にも主に思ひれてお出をすめられた。其お方に
 似と思つてお呉んなまじりや。私ぶ身に取りいしちやア
 眞實嬉まうおざりぬ返ヨ 金「何の嬉とい有やすめへ。夫ヤ
 ア眞の勤めの手管實の七りけつをいざらう づる「テヤ勿体
 ない何で欺をヤシいせう。初會うら此様とをヤシいまた
 ら。おさげすみなんすうが主の爲なら都合しても。呼まうし
 たふおざりいすが。主やア大方通り一遍で。もふお出なんす
 こつちやアおざりいすめへ 金「夫やア皆な此方いふと一河
 の流れ一樹の蔭他生の縁が有べころ。こうして態く来る

金五 眞名 鶴雨 爲花 巷老 將不 似梳 揃口 氣

といふ。者おめへがさういふ心ならわたしも根限り通ふ氣
 だの宜時分に突出まぢやア恨みぢよ づる「どうしてマア。
 主を突出しいしたら。夫こそ罰が當りいせう 金「それのそふ
 と。縦へおも。他人の空似と云けれ。どふも他人とい思ひれ
 ねへが。ためへのマア一体どここの生れか。馴染のひに話で聞
 せき づる「夫やア主のとぞんすから。お話ヤシも致いせうが
 身の上をあかしいしたら主に愛想を盡されいせう 金「そら
 思ふも尤だ。何れ此廓へ身を沈めるふの仕合のよくつ
 て来た者と無ら。きに恥と云ではなし話して聞せて宜

ぢやアねへか つる 「實はそれもそうでおす子。そこならお話し申しいせうかアノ私の誠にく遠くの國でおざりいすよ金「ハテナ夫じやア蝦夷松前ウ。紅毛の果からでも來たのり子 つる 「チホ、、、ばからしうおすヨアノ上方でおざりいすからさ金「フリアノ上方ハテナ本當にの つる 「アハ夫だから遠くごと申しいすのさ 金「何の上方の生れなら遠くなどと有ものか。ハテ縁と云者のいおつなもので。私も矢張上方せいろくさ つる 「チヤ虚を吐なんし。なんのママ主あんぞが上方ごとおつせへしても。上方にやア生のやらな。いさ

晴天

なれ方のおざりいせんよ 金「さらさ私様の不意氣を野郎いどこの國に有者の。そゑて卿へい上方の若珠數屋町の邊じやアねへの つる 「エやんよさらでおざりいすヨよく郎の知つてお出なんす子その珠數屋町の六兵衛と申しいす貧しい者の娘 金「ヤ、そんならアノ珠數屋町の古鉄買の六兵衛殿の娘で有さかアノ卿へかト 眞名鶴の何かのまらねど我身の上の幼き時より。母に別れ家貧は故。去る方へ里に行て漸成人なしたる所里親に欺て過し年此大儀の苦界に沈。父六兵衛の夫より先に。亡靈の數入り只た一人の

文勢 急ニ而 后覺ニ 感觸、 切、 奇中、 奇妙、 中妙、 讀者、 不暇、 必接

妹の。蕪の上から情けある。ね方。貰れ育つた。と聞けど遂に。一度わひもせず便りなき身。常々から。妹計りが行々の力。と思へど。うひなき勤。まめで居るやら。どふまや。らと。案じ。るのみと身の素性を語るを聞て。金五郎の。驚くと一方あら。ず。我こそ卿の妹の親の文之丞が男子なるが幼なき時よ。り妹とお龜の。吾身と共に人と成て未だ枕ののいさねども。行末女夫の約束して中宜暮す其内に。我の此地の叔父の家へ。貰われ來りし其後にて。お龜の家出し果たるにや行方の。知ぬ其處に。今又思ひ掛なくも姉のねん身に廻りく。て。今

金五 已以 阿龜 斷ニ定 死ト而 鶴更 確ニ定 龜死一ト 以レ是 至テ再ヒ 逢ニ益 奇

宵名乗逢と云も。矢張綿る血筋の糸のあやしき縁也。けりといちぶし。うを物語れば益々驚ろく眞名鶴の便おせん。と樂しみ待し。只一人の妹迄。世おなき人と聞くらひ悲さ。いと。いやま。さり暫時涙にくれに。なり。う。る縁しの淺うらぬ。中なれば。尙様く。に。身の上の事語り明しぬ。去共互ひ。よ一ツに寐す。一旦金五郎も妹お龜に。女夫の約束せし事を。れば。今更との血筋の姉が流れの身とても枕のすへ。流石。よ後めたく思。バ眞名鶴も又其心故好た。男と惡からねど。帯紐脱ては死なれる妹の供養にならずと心お慎み。いやら

雲中、
龍僅ニ
見ニハス尾
端一



しきとよハ言ず。去乍ら金五郎も此儘にも振捨られねバ。是
より常の客の如く。折々眞名鶴の處へ通へど。決して枕をウ
ハすとなく。酒等飲てハ憂を語りぬ。うくて其月も暮八月の
始ふ成けるに。例の如く思ひくの。俄狂言踊りなと様々
有其中に額俵やといふ茶屋の今度抱の藝者の小三。品形と
云とりなな迄。五町に稀ある容貌故。浅間の踊に此小三を傾
城奥州に仕立。衣装着つけも美を盡し。淨瑠璃は登見本阿輪
太夫よて。人の耳目を驚かそ誦故。廊中での大評判。折節金
五郎と待宵の月を詠つ。俄を見物なすべしと例の如く守

凡ソ一
篇中
令ニムル人
回一ラ

田屋の二階めて。眞名鶴と共に酒酌りわし。今や來りと待る處へ。程なく來る淺間の踊り。節可樂き太夫の淨るり「わさい心どしら糸のそめてくやしきなれ衣ありしながらいッまへ小づまそろへてしとけなく風に柳のまくま、にまのせるはせのつとめじやとてもしやな客にも比翼ごぞ思ふ男の山鳥のトかゝる文句につれて踊る小さんを。金五郎の何心なく見れば不審や過し頃家出して死しるるお龜に。寸分違ひぬ顔形。是と不思議とまたたゝもせせ。見れば見る程違ひぬ。是も我身の迷ひのと。思ひ直して見るもの。外の女

腸者
有レハ一
篇則知
才筆今
此篇鶴
金五遊
迄奇文
未去眼
又見此

と思われぬ。若や浮氣な心を出し男を作へ此廓へ逃て來て居るとにやど回り氣すれば腹立しく去とて人に間も異なる者宜敷様子を見究んとて知ぬ振にて見て居れば。幫間のへ不吉見取つ、へ不「イヨく濱の本店小さん。大明神様く。外おと決してござへせん三千世界に只一人目八「イヤ有難し妙でござへやす。濱村や丸むぎ額俵屋の大黒柱。難有いの天上め。咲屋姫の再來か。三國一の無類く。金「大總贊のふ。賄賂でも貰やアしねへの目八「モシ旦那賄賂どころか。けふも昨日も昨日も今日も文玉章の數々ハ。ヤモシあん

奇文
何等
才何
等筆

金五
巳疑
小三
幫間
乘此
以ニ
々ヲ
木先
腐蟲
生之
者

あうつ、い美婦人ダ附文を爲ので逆上やすのさ 女げいまや
おどわ 「チヤ目八さん強ゆこつた子。十九文やの店前の様に
自惚鏡が澤山ぐミチホ、目八「へん 噪ましい妬なく
おどわ嬢の氣前の宜グ。兎角妬ので恐るのッ おどわ「チヤ止
てお呉おまへのお神さんとの些と違よよモシ旦那へアノ小
三さんの子 上方うら此頃参りましたさうでございませうが。
よく早く吞込ましたぢやアございませんか 金「さうか飛だ
遠くから賣れて來たの。大かた男と欠落でもまて。其男に賣
れこのごらう 目八「旦那さつゝ者。貴公の判談の通り。男と

遙々逃て來たが其男に嵌かされて。泥水へ沈んだのでせせ
へまはッサ まなづる 「ヲヤ、アノ子がかへどふもさう云
様子に、見えいせんねへ。若へさうぢやアをつせんかへ 金
花魁とさう云けれど。ろこが譬の小袋と小娘油斷のあらね
へ世の中さのへが 「ナニ、旦那さう。云譯ぢやアせせへせ
んッサ 私 が此間額重へ参つた時。宜氣を付て見ましたか。
夫の、起居振舞の物静やかさ音聲のさやりよして 鶯
の囀る如く多弁で無とすそでなく意氣でしやんとして程が
よく。鴨川の氷を産湯よあびて京れまろいぬ。袋に入て

磨き上た眞の美女と子トのあはところへある「モシ旦那額
 重の小さなを御覽ましたか 金「フウなんどかるくく見な
 んどが。余程美婦人ださうなれ 庄「左様でございませ先此頃
 での藝者だと申す好金箱を抱ましたと どのそのうちも金
 五郎いひねアノ小さんこそ面ざしと云。上方から来たと云
 に手とおき 〆。お龜よも相違の有まじ。眞名鶴にも打明て。様子
 を聞んと思ひしが。なま中明様に語りても。儲で彼してゐるから
 の心變で男の爲に身を沈しも計難しと。様々お思案して。
 今宵の去り難き用有とて。そこそこに座したも死り上。眞名

又々有ニ
 此ノ奇
 文ニ讀
 者不レ
 暇ニ心
 接一

鶴に別れて大門を出しガ。忽ち又取て歸え。私の額俵屋重
 兵衛の處へ行彼小さんに口を掛て。二階へ上り酒呑乍 今や
 來ると待所に程なく小さんは俄を仕舞うかぬ顔よて何氣な
 く。二階の階子をとんく。と。上り來りて金五郎の。傍へ立
 奇顔見合せハツと計に驚さあひて立んとするを金五郎の
 をどらへて目「コウ小さんとやらなせ逃る。空障を客ごから
 さに入らねへか。氣障あらさで宜けれど。物も云すにそ知
 らぬ振の。見忘れたの。見くびつたかよもヤ忘れのしめへガ
 の。未練が残つて來たのじやアねへ。聞ことがあるから下に

ありトいひれて小さんのいむねよくきなんといらへんとはも
 たり金五郎のあや「コレあらはつしねへは面目ねへのつ。エ、
 ろのざまはマア誰故ぞ。定めし可愛男の爲に。心がらの此動
 歎。宜物をつもつて見るよ。犬猫でも夫相應に。思と云とは
 知てゐるぞ。夫に何だ己の顔を踏つけよすると愚な事。葉の
 上りら育られた。産の親より恩の深い。養親の情を忘れ恩
 を仇の犬畜生。ざり有親の名を穢し。耻をどぢとも思はぬ狸
 め。よくマア面もかぶらつふ。のめ／＼と出てうせふナ。い
 かに遠路を隔る共。多くの人の入込廓。此鎌倉も己が親父

の文武の弟子は幾何も有む。此街へも皆入込は夫に面を合
 しても。恥ぢやア有めへ恥でもなからう。さういふ事とは露
 しらず。親父と直な心ろから。神かくしにでも爲たのり。又
 と身を投て死んぐかど心を盡して尋ねさせ。占八卦御闘お
 も生死の程も分らぬから。家出した日を忌日とまで。佛事供
 養も懇にせると委しい書状が來る故に。子供の時より一
 ツも育ちし馴染がひあ朝な夕な。念佛申てやふふと思へど
 今は養子の身の上なれば。両親の前へも遠慮がちで心には
 まかせねど台間を見ては回向まで抹香臭い佛いぢりも。萬

一健しやであるならば身の祈禱にもならふかと心盡しに
 引替へて生根の腐つた思知は大切な親を振捨て此土地へ來
 て泥水活業チ、貞女だ。節義者だ髪飾りの櫛笄はであ
 衣装はうと氣な取なり長唄豊後流行唄や。一中節を呻つ
 り是見よらしに踊りを踊つて客の機嫌を取と故人も迷とふ
 惚もまやう。悪性者の天上め。モウくあいのつかし納め
 だ顔を見るのもいまくしい。物を云のも是限だから。勝手
 次第は浮氣をしをれトいひ立て、立んとするを小さんはし
 りしりしグこいぞ大 小二サ、みな御尤でござりますか。マ
 事とあはて、取付

ア〜待てくゞさいまし。委しい様子を御存じないからお
 腹をお立遊ばすも少しも。御無理とござりませんが是に
 色々深い譯が 金「チ、譯も有らふし。義理もあふふ。けれど
 も夫やア聞耳や待ねへエ、いつかふさげたとなさねへり 小
 三「さ、へいなしと致しません。言がひのな心から思ひも
 よらぬ疑がひ。死のふと覺悟極めしは。今日の今まで日に
 幾度矢張死あれぬ因果とふなりとして今一度阿郎のね顔を
 見た上にて夥多の人の入り込此の花街夫計りを樂しみに
 つらひ苦界よ身を沈めて恥や人めよ氣も付ず 金「エ、噪し

凡此見書者讀至此忙々開下篇評者如見之

い宜にしる。さるの文句めいた。そんなせりふとをかしく
ねへ。流行言に道理を附たり。間に合の口ほどても。モウろ
の手ぢやアをかされねへは 小三「左様ではござりませうが
何卒情と思召してたつた一言申すとをお聞きすつてくゞら
いまし。其上にては兎もかくも殺してなりとお腹いせ。お勝
手次第になさいましと身を投懸てすがり止。泪乍らに詫る
にぞ金五郎も。流石又心強くは云者の悪からぬ小三のと故。
すげなく立ても飯られねバ。袖振拂ひ身を反け。銚子の酒を
手酌にして。茶碗に受けてくゞと呑み。手枕をして寐轉るる

第三回

當下小三と胸撫御し。泪を袖み拭ひつ。金五郎の側へ指よ
り小三「今更賢を申ましても。一旦お疑ひを受まされれば。
誠とは思し召まいが阿郎にお別れ申てより一日片時忘れま
せず。泣ては明し泪てと暮し。筆を悲しむ日を送るも。やが
て東へ落附たら。呼によますと仰まやりの其おことバを力
にして今日の明日の指折て待バ一日も十日の思ひ。明て
も暮てもお便なく一ト月立ニタ月過三月四月と日と立て共
嵐の便りのた文さへ。ならて暮して居る中に。此春の彌生の

寫シ來テ
有ニ賢
際躬
行ノ看
眞ニ有
聲書

頃。日さへ忘れといたしません。上の八日の夜も更て。皆家
内は寐しづまつても。私くま計り目も合座過去行末と
かう。思ひ回せばいとしく。便りなれ身は阿郎にまで捨ら
れては世に頼みなく寧ろ死なふり果やうかと案じ過してを
ります折のら閨の戸とんく打ちたゝま。おのめくと阿
郎のお聲。扱くと嬉しく戸を明て見れば何にも眞の暗これ
も心の迷ひか。又寐ますると又とんくおかめくと呼
聲の。三度四度と聞ゆる故又出て見れば物もあし我と我身

讀者亦

悚然毛

骨敲

第三回

只說龜

落草不

知至此

で合點も行ず途方に暮れば寺々の響く夜中に鐘の音のあわ
れ無情を告るか。と承らへ難く胸迫り。物うさ月日を送りま
すのも。必苦しく苦患も成。事を死んこの増であらふと思へ
バ頼りにぞくくと首筋もとから身の毛立死ねよくと死
神の。附て死のを進めますの立てもも落つかず我を
妄れて飄々と家を抜出走りましたが。其後の事ハさつぱり
しらすどうして身を投しやら。加茂川へ流れ着るを近所の
者に引上られ。息吹返して見ままた所が。顔も見知ぬ強い男
が。せむんとやら人買とやら云ふ。男と二人で色々なあゝ嫌

自小三、口上仔、細説來、如此而、得文妙、阿龜雖、欲死出、家其不、欲死必

らしいとを云て。抱れて寐るか云と聞かんと。云れてはわさ恐ろしさ色々に詫言してもこのい目計致まして聞入れのない無理非道と。云て身をけがす位なら。舌を喰てなど果ませうと存じました。が身を投てさい助る者を又命の盡ぬとなら何卒して東へ下り阿郎の顔を今一度見ました上で死たい物と思た處の通じましたか。其悪者の云と聞ずの遠い大磯へ賣てかま。金にするをやら申す故。とても運悪く死後れ。悪者の手は捕へられてい。お父上の所へ直すをあの返すとも有ますまいし何卒愛目を見位なら。大磯の廓の朝暮に。

超尋常

人千萬

倍也故

心自構

造符會

理而止

死其情

可悲可

愛可憫

人の入り込處と云々。そこへ身を沈めななら。阿郎に回逢のれふかとはかないことを便りあして。御恩の深い父上を。れ見棄申す心いなければ。心一ツに詮方なく。とうとう此額俵や。歌妓に賣れて参ましが。思もよらる只今。阿郎は目お懸まして餘のとの嬉さ。物さへ云せに立ましたは私。が前後の考へなく。不調法でござりますから。ね許なされてくだされま。殊に阿郎に逢たい計に。覺期致て此苦界へ身を沈め。沈めました。今更お目に掛まはとまことに身の程が恥しく。消てなくなりたふござります。何卒大切のお父上

可レ喜レフ

女兒丹

誠能令レム

大丈夫ヲニ

復不堪レ

涙金ヲ

解欲不レ

解可得レ

乎

を捨て。道みちならぬとに身みを墮おとし御苦勞掛くろちうけて阿郎あたらは。お憎おんにくしみを受うけ。此身このみ何時迄いつまで承うけたまへをられませう。何卒どうぞ此世このよの思おもひ出いには今迄いまのお疑うたがひをおはらしなされて下くださりましと。しじらなみどのうるみおゑにひとのきこえをはいりてわびるとバのせつなるをさけけさすがに金五郎きんごろうも。つたんはらとちけれど。うく迄まで我身わがみを深く思おもふて此泥水どろみづに身みを沈しづても。蓮れんに似にる心こころは潔けつ白はく。苦勞くろちうさするも我故われゆゑか。不便ふびんの者ものやど心こころには思おもへど男おとこの事ことなれば。其儘まま心こころも打兼うてかねて。返事へんじもせまよ空睡そらねむ。小さんこさんもすりよりてかほ。「若阿郎もしあたら是程迄これほどまで申まをすのにお疑うたがひが晴はまさしのどきく。金五郎きんごろうさん何卒どうぞ御堪忍ごかんじんのそバして。お心こころを直ただせぬら。エ。金五郎きんごろうさん何卒どうぞ御堪忍ごかんじんのそバして。お心こころを直ただ

女兒家
口吻

金五心

已知コ

小三丹

誠ニ而

尙テ且

以テ惡

言ニ刺ニ

衝チ小

三チ是

してくださりました。もしお疑うたがひが晴はましたら、只ただ一ひと言こといいつものやうに堪忍かんじんするとやさしいお詞ことば聞きせなすつてくださりましよ。ト。七しちかねあひすむすめ氣きの金五郎きんごろうにと心附こころつきて。りつきてしげしなみだにくれなるが。心附こころつきて。涙なみだを拂ぬひあふり見回みまわし金五郎きんごろうの側わきへに置おきたる指添さしそを音ねせぬ様ようにそろりと扱あを見るより金五郎きんごろうはね起おき。ろの手てをしへつ。金かね「コレ何なにをするあふねへ人驚ひとおどしの刃物やいば三味さんまいウトい。かほつくく。小さん「エ、れ情なさけない其そのおとバ女子をむすめだてらに見みて泪なみだはろり。人驚ひとおどしの刃物やいば持もたせう。夫そのやあんまりでござり升あがたなん。阿郎あたらが男おとこもでお情なさけない。胸欲どうやくでござりませう。是これ

似見 金五無 情一釋 史常套 不如此 不可也

程事を分まして。お詫言を申すに只た一言のお返しもき
く暫くお目あり、らぬとて。其様にもマア私しが悪てお嫌
にありまゝたり。夫りや阿郎でもござりませぬ。縦へ女夫の
のためいせを共一旦阿郎のお口から。戯談に被仰つたかは
存じませぬが。行末かけて女房よ爲の。二年や三年遠ざかつ
ても。變る心とさういとの。短氣と出さずる便りを待のと。人
計りを嬉しがらせて。纒半年余りの間よ。左様お心の變りま
すは余り聞へぬ阿郎のお心。何卒其様よお嫌なされば。何と
樂しきに今日夕日から空に命を永へませう。私かなき後で

突然 有此 言小 三耳 邊如 聞晴 天雷

せめて一遍の傍回向をど。申した處が傍嫌の私。とても夫も
叶まさまい此も皆約束と。致かたもござりませぬト。おだん
ましまたぬさのくるを金 金五「いやまつ」として後悔する
な。夫程は深く思つて居あら生長へて後の世まで。人の物笑
にならぬ様に。濁し名どもすゝぎわけ生別れた眞身の姉よ
廻り逢て名告あひ古郷に残した我親父に。孝行せうとは思
はぬか。殊に汝の身の上此家へ。賣れて來たと故よ我者な
らぬ主人の體。なりや今こゝで死で見ると。主人も難義此お
れも逃ぬ中で難義をする。死の一旦にしてあし易く。生

難と云ふ所へ。心附ぬかコレ小さん小三「エ、そんなら阿郎
 疑ひが晴ましたとヤシますの。夫や本當で御座ります
 かへ金「ウンヨなに虚を吐ものり小三「エ、嬉うござります。
 それで一寸氣が落付ましたし 互ひに心のとけながら金五
 ぐとむもあけ言付て唄妓帯間をよびにやると。程なく皆々
 ぞやくと来る 目八「へい旦那其後の一別一來とんと。見參
 仕つりませぬ金「ほんに目八公「さつさ逢たまんまぶつけの
 目八「ホイさうで有ましたつけか「たいもく藏「大しくじり目八
 公夫ちやア先刻已來と云てへのふ ねとわ「チヤ旦那お歸



んなすつたど存ぞんぞんましろ又またこの穴あなへお這入こゝろあさいまし
 た子こ。チホ、チヤ小三こさん是これはお早はやう。無なお勞くたびれあすつ
 たらうト あいさつはるに小さんこさんのけ 小三こさん「アイ漸やうやく々今いましま
 とられしとなみだをかくし
 ひましろ。誠まことよく暑あつくつて。びつちより汗あせに爲なりましたよ
 トいひまぎらせとどやかくにむねのせうきの もく藏くら「時ときよ
 をさまらねばさしうつむいてふさぎいる
 花魁おいらんの未御入まだこゝろ内うちがこせへませぬね。モシ旦那たんな拙者せつしやがちよつ
 と勅使ちやくしお立たつませううト いふに金五郎かねごろうの 「チヤニ足下そつかの足を
 わらひながら
 勞らうす迄までもなしさ。ちつと見みけけ山やまが有あら花魁おいらんの處ところへ勅ちやく
 使しもたてま内意ないいもしねへのよ ねどカ「チヤこく旦那たんなの花はな。

此一言 刺三衝 小三心 頭二鏡 於手將 劍一

魁おいらんにかたい約束やくそくをあすつたぢやア有ありませんかへ夫それにマアそ
 んなとを金かね「ナニサ今いまに容子やうすの分わせへすりやア「具名きみ鶴つるも呼よび
 よやるのさア「そんなと借置かことして諸事しよじ酒さけだ唄うたへう
 たへトげいしやの長ながうた「さうし「黄菊きぎくとしらぎくの。おな
 じつとめのその中なかに外ほかのさやくしゆしゆの捨すて小船ふねト歌うたのやして
 賑にぎわしく次第しだいに銚子てうしの數かずもかかれババのやことくせりののやり
 唄うた。上方かみかたうでをたつた立たつれど。とのおく小三こさんのうさくせせ目め
 の小三こさんのか目め八はち「コレ女房にようぼうどもなせマア其そのよ塞ふさでをる。
 ちと浮うき々々しやいのふイヨ成田屋なりたやア 小三こさん「アレモウ嫌いやぐヨお

ふざけでない。目八「コレサキせ其様にびんしやんするのだ。人目が多くて恥しいかさううくハテさて初心赤子でい有ぞおまへとわたまのその中の知ねへ者の子エ若旦那 金「大きにサの。左右此子の男が嫌へださうであんが馴染のねへおれても些かそつとの向どか彼とかのふ。おどわ」とわ「左様さねへ。今日のどうのおしたさうで誠に塞てお出なさるが。こりやア何か釋ぶの有ませう。ト 金五郎「わざとまぎらし」金「さう。大方色男が待てるのを此方へ呼ぶで夫でさつく塞ぐさう。何卒おれが様なのつべらばんの女にやア縁遠

不
勝
言
言

から。兄弟分になる積ぶ。小せへ物ぢやや面倒さうのらサアサア是へついで呉なト 大きあゆのサへ酒をつがせのみ「モシ阿郎それでと余り過まらぞへ 金五郎「なせ酒が過ちやア悪のか 小さん「悪と申すぢややござりませんが。余り飲とお身の毒私が助て上ませう。是も矢張勤の一ツ皆さん笑ておくんあさんなよト しやつといさ 目八「若旦那私しが目の再來め。此らのはんによしまのく」 目八「若旦那私しが目の悪いせへか小。三さんのとふも花魁に似ていあさるぢやアとせへませんりの金五郎いざとぞらどやけ

「小三がカとれ〜ト見らひ
 婿さ恥かしさにいながみでか
 でもねへ。おれにもさう見ゆるやつヨ
 だのふ小三トいぬるゝたびに小三
 しあんぞか 金ア、何どのひよく酔が回たケエ引コウ小
 三水を一盃持て来て呉さトそのまゝ、そあへうちふすに
 「旦那若モウ狸でお逃さるゝ子夫やア近頃阿郎でもほせへ
 ませんのモウ一ツ厭じませう。モウ旦那お寐やアいじません
 モン旦那此のしたりモウおよつたそらな目八「そんなら。モ

ウそろ〜軍勢の此陣を退かふのふおとわさん おとわ「さ
 うさねへトいふどころへ小三のちや小三「チヤ旦那のれよ
 つたかへ 目八「さやうさ余り飲續だからちつとおよるがよ
 うござへやせう。そんなら小三さんおゆるりと もく藏「併し
 旦那と小三さんとさし向ひぢやア。猫に鯉節泣子に乳で。ち
 つどあぶねへ者だチヤ 小三「チヤ嫌よ私も今に下へ行グチ
 アノおとわさん憚り乍ら枕とかいままをちよつと下へ左
 様いつてお呉なさいな おとわ「アイ〜合點でございませ
 ヨ みな〜の引違て下女かい巻と枕を持来り 下女「モシ
 下へゆく

斷ニ盡シ
人ノ腸
惱ニ殺ス
人ノ心

枕をおさせ申ませうかへト 金五郎の 小三の膝そつとつく
小三の心を吞込で 小三「ナニわたしは今お起しやて上るか
らそこへ置いていつてお呉 下女「ハイくかしてまりました
トまくらをおい 金五郎の目を明てあたり見回す枕を取て又
ね轉び 金「七段目の由良と云計略だサアもつと此方へよん
なト 小三の手を 小三「又誰か参ますよ 金「何のこつたな
どり引よせる そんな野暮な者がゐる者か但しの嫌か嬉くねへか 小三「阿
郎のお心が解まえて嬉しいとの嬉しいと思ふお附て又一ツ。
心掛りが出来ました 金「ろりやアマア何か矢張誰にか義理

幾多眞
名鶴名
自初
印在
小三
上至
此初吐
出来

どてり 小三「人の事より阿郎のことさ。聞けば千年屋の眞名鶴
さんど。深い中と被仰ると。眞名鶴さんは情を賣が勤めの
習に引かへて。私しは又座敷計の。はかあい歌妓の身上もろ
縦へ何様も譯有ても歌妓は抱への女郎衆に。勝れぬが廓
のならばし。夫故な中お目よ掛ても今日より末と何様な。
つらい憂目を見ませう。知ねバ知ねで心は濟と。阿郎と眞
名鶴さんとの譯も有バ。矢張り胸を焼す種。客氣は女子の謹
みなれど。流石女の淺はりに宜鏡計はして居れず。何よなと
で阿郎のお名迄。出る様などでも有ませうと。今から夫が

先づち苦勞くろう。思へおもを悲かなしうござります。金かね一ひとあんの事ことだなこりやア可笑おかし。そんな苦勞くろうを今のいまならずと天上てんじやうで鼠ねづが笑わらふによ。此廓このまの立たたと云いつても。思おもひ込こんだが男おとこの意氣いき地ぢ。廓まの掟おきてを破やぶて見みせうと。云いはまことの意氣いき張はづくた。眞名鶴まなづると己おれが中なかも。深い馴染なじみで有あふりと一寸聞きても腹はらが立たはづ。牽頭歌妓けんとうかぎも委こいとは。互たがひに顔かほに出でるぬのり。惚ほて通かよふとあもつてゐれど。是これもやア深い様子やうすが有ありのヨ。と言い譯わけは外ほかでもねへがおめへが家出いっでをしたとを報告しらせの狀ぢやうに落魂かつかりして。此世このよも望のぞみも絶たえぬら。生なへてゐやうとも思おもなんだが又宜またよく々考かんがへて見みると。

實じつも死しんだり壯健たつしやであるの。又また外ほかに云い替かた男おとこが有あて逃にげたのう。取とりとめたともわづらぬのに。己おれ計はかり心中しんちゆう立たるも余あまり愚痴ぐちな穿鑿せんさくで末代人まつだいひとの物笑ものわらひ。殊ことも上方かみかたの親父おやぢを始はじめ此地このぢの養父おやぢや養母おやぢに。苦勞くろうを掛かるゝ大不幸たいふかうと心こころで心こころを取り直なおしても。おめへのとが忘わすれられぬへうら。他ほかの女おんなにや心こころもうつらせ。一日いちにち々々くすくすと暮くらち。友達ともだちお誘よそて。嫌いや々燈籠とうろうを見物けんぶつに來きた。日ひが丁度どきどき眞名鶴まなづるの。突出つきたしの日ひで取とり々に美うつくしいと評判ひやうせんする故若ゆまじしや少しも似にてゐるうと。見みれば迷まよひか汝そなたに其儘そのまハテ似にた者ものも有ある。客きやくになつて他乍聞よそぢがらバ矢張やつをり都みやこといふから。心こころのうし

くなつりしく初會の晩うら打解て互ひよ身の上明た處似
 たのも道理お鶴と云て。里ふやられた六兵衛殿の。惣領娘と
 聞て屹驚。妹お龜の斯々と咄せばお鶴も共に驚き。泣つりこ
 ちつめいれな話まに一ツに寐るの借おいて。妹の汝に心實
 立。帯紐解ぬ洗石の氣性。我とても又おめへの生死が。知れ
 ぬからとて姉の。眞名鶴を抱ても寐られせ。と云て見捨るも
 本意でねへうら。妹のよしみに客になつて。末長く力になら
 ぶと。約束をして通ふ故。深い様子の有とを。誰一人知る者
 もなく今日まで義理であそびに來たのヨ。所が今度額重で

讀者亦
 不知

抱た藝者の小三と云が淺間の。踊りを踊と云が廊中での。隨
 一と。取々に評判するを守田屋の二階で眞名鶴と共に。見
 れば汝に違へねば。と云とで此廊へ遠路を隔て來てゐる
 かと不審に思へば幫間等が。男の爲に身を賣たの男と遊た
 の何の彼のと。云を聞ての此胸が張裂計りに腹が立て。心
 の腐た女の事振向て見るも思々しいと。あきらめて見ても
 凡夫のと故。矢張迷ふ心の愚痴から何でも實否を糺した上。
 兎も角もしやうと思つて。皆あに知せず歸つた振で取て返
 してこゝへ來て。見れば汝に違ひのねへの顔を見るより物

も云いずはに。迹あとるから猶なほ腹はらが立たて今いまの様ようも云いつたも無む理りぢやア
 有ありめへがの。かこう心こころが解とけるかからら眞ま名な鶴つるを愛こへ呼よんで兄弟きょうだい
 の名な乗のりをささせてやるせせトとききいて小こ三さんの犬いぬ「エ、そんならア
 ノ眞ま名なづるさんさんの私わたしの姉あねさんさんでござりましたかへアノ姉
 さんさんで金かね「さうヨ正しやう眞じん正しやう銘めいのおめへの姉あねよ小こ三さん「エ、そり
 やマア嬉うれししござりますす。さうさうといい微み塵じんも存ぞんせせんて淺あい女に
 の心こころから色いろ々く愚ぐ痴ちな恨うらままもつたたいない共とも恥ぢかかしいいとも。
 又また嬉うれしいも山やま々くなれどど。なんなんの因いん果ぐわで此この様やうに。兄きやう弟だい兩りやう人にんが揃そろ
 揃そろつてつらつらひ勤つとめの流ながれれの身み墓かぶないいなりで名な乗のり逢あひあひあ積つ話わし

一句一
 涙一讀
 一涙

のうたとも。亡な兩りやう親しんの草くさ葉はのううげから。涉せつ聞きなすつた。らうか
 ばれままににまい。同おなじ勤つとめの其その中なかでも欺たぶれししといい云い乍なら。眞ま名な鶴つる
 さんさんの親おやの爲ため。苦く界がいも沈しづみみ罰ばつでももない夫それに引ひ替か私わたくししいい。いた
 つら事ことの心こころから。涉せつ恩おんの深ふかひ涉せつ父ふ上じやうを都みやこも残のこして此この勤つとめ我わが身み
 で我わが身みの愛あい相あいももこころろも。盡つつつて、恥ちづづししい。面めん目ぼくももない身みで
 ござり升あ金かね「成なる程ほど夫ともも尤もつともだだ。ハテ何なに事ことも皆みな約やく束くわん。どどふふする
 者ものか仕し方かたがねへへととななととんんをを苦くに病やまねへへで。久ひさし振ふだだか
 ら。浮う々くして。ちちつつとと莞わん爾にして見みせせああ。何いつ時ても恍わう惚ぼつ様やうだだ。ままあ
 づるとおめへへと能よくく似にるるが。並ならびび見みたらら又また一いち段だんののれれめめへへのは

うが美しからう小三「チホ、、そんなとを被仰けれど。姉
 さんとおまへさんは。どふもしれませんヨトはつこり笑て
 金「こいつア可笑姉さんとおれがどふしたと小三「チホ、、
 、どふもあさりとしますまいの。私しとどふも金「なんの事
 だ寐たふと云のの小三「ハイ金「ハテおめへも疑ひ深い今
 もくどく云通り。幼少時から一よ育つて。余り可憐がられも
 しなんだが。悪がられもしねへ中だにおめへを捨て眞名鶴
 に見替心が有ものか小三「夫でも戀と思案の外。男の心と秋
 の空とやら。お疑ひもふすでと御座りませぬの。アノ芝居で



あふいら
 赤のねど
 初ちきり

此場味 與下夜 靜更深 時隔屏 風聞才 子佳人 情ヲ語上

も致すお半長右衛門を見るやうに。思案の外の不義いた
づら長右衛門は年と云。おさぬといふお神さんのある身分
で獨り娘のお半をバ。身重にさせたいたづら者金「コウく
何を云そりやアはんの狂言ぞ。よし又實説のことよもしろ。
なんのれれが氷 臭そんな心を持者うな朱に交れと赤く成
と。れめへも僅な間泥水を吞ぐら。大そう手も足もはへたの
モウ宜加減に嫉妬をやいて久し振ぐうらもつと此方へよん
ねへヨト ておびをどく 小三「私しモウ余り嬉しくつて夢ぢ
やア無かと思ひますヨ 金「ヘン夢ぢら大方。早く覺れば宜ど

一般讀 者不 堪心 痒

思うだろ 小三「ろんな悪いとを夢ならとふど何時までも
覺ずに居ればよふござります 金「虚言。そしてモシ夢ならど
ふする氣だ 小三「どふも致ませんが。お側にゐて 金「それの
ら 小三「ヲホ、嫌でございますヨ 金「寐るのが嫌 小三
「どふぐか存せんと かねをわかしく 金「ナニしらねへことが
有もの。誰かにおそわつて御存ぞだろ。ドレ一寸あらた
めて見ようト 帯も心も打解て。契り染る湯うたびら玉の
汗をやしぼるらんかくて是より金五郎は千年屋へ人をはし
らせ眞名鶴を招きよせて。小三は對面させるか。眞名鶴も

頻りに驚き生れて始て兄弟の。まめで逢ふたる喜びに。嬉し
 さ余る悲しきは身まゝ、にならぬ勤と勤め味なき世と打か
 こち。泣つ笑つ夜と共にかたみ憂を語る。うくまで小三
 と金五郎と淺うらぬ中ある故眞名鶴は小三の事云迄はなけ
 れども。千世に入千世もすゑかけて不便と思ひ憐みて。お情
 掛けて下りしものしと。しと念頃頼ける。情も金五郎と小三と
 契りを込しより互につのる戀中に「一日逢ねば氣お懸り。二
 日も顔を見ぬ時と心も濟き苦にある迄に一ト年余り通ひけ
 り。頃し師志の半心にて。雪は木並への花と散寒と厭はぬ

若い同士、雪見の船を堀へりけ。運をいづして金五郎へ。微
 醉機嫌に只獨り頼田原屋へ入り來れば。夫と見ふより若者
 これハ旦那大分お遅ふ此大雪に。宜御機嫌で金「雪の下夜も
 雨れ夜も通ひ廊の大門をの。ハ、ハ、ハ、めつばら寒くつて元
 氣なしヨ。十公常の通り飲込だらうの。十吉「チット合点承知
 の助。モシ今夜らハしつうりお暖まんないまハサアお二
 階へトあんないに金五郎奥の小座敷へ打通れば娘分のおさ
 せんをもち「チヤ金さん宜光來いました。ね珍らまい物々澤
 山下ましなねへ金「さらサ夫だから一ぱい寒いのお菊「よく

此マアお寒いに。阿郎も余程小三さんにやア御信仰でござ
 います。金「御推察の通りス。併しおめへ何ども容貌のよし氣
 めへと云信心をする男が多からふ。おまへへ「チヤ宜敷申てお
 くんささい。何の私志の様な者を捻つて呉人もございませ
 んヨ。金「甘く云せ。しつやりとしんねあではまぐりのね吸物
 をべてる人が。のふお菊さんお近く「チホ、あんな悪
 しいとを。小三さんに云附ますよ。金「ハ、コウお菊さんお
 めへに献上しようと思つて持て來る者が有たつけ。ト
 くら本べつこのぐわん「およしなさればよいに毎度ども
 ぎくのくしを出してやる

ふお氣の毒様で。金「何のマアだまつて取て置なナおめへの
 好な。紀の國やのぐから。誠よ有難ござります。ほんに
 鉄菊がた源之助のでござります。どふも賊に風と云甲と
 云。寧好た形でござりますヨ。金「コウ時に小三の都合の能か
 の。どこぞ座敷へ出てゐるかへ。「イ、エなんでございま
 すヨ。方々うら口が懸ましたがなんぐか氣色が悪いとやらで。
 皆なお座敷を斷つて引込てゐなさいますよ。金「さうかどふ
 したの。又例の癩だらか。ナニ癩てい有ますまいか。大
 方此雪お當んなすつたので有ませう。小三さんの氣色の悪

いの。おまへさんのお薬が、「ち宜さく」ますから早く知せて
 参りませう。金「何のかんのと嬉しがらせるのか。おめへも余
 程去者だヨト。ちよいとたたく」チホ、有難ござり
 ます。ト、たさく、立て下へ行はせ。階子を上つて出来る。形
 の何か。なやましげに顔色さへも常ならず。洗ひ髪なる島田
 鬚。髪の後毛寐亂れしを。黄楊の小櫛にかき揚つ。重顔に
 も驚りと笑を含み愛敬は。俗に所謂命取男殺と云べけれ。
 金五郎のあんかへあたり寐轉びてゐる側へ小三の寄とひ。
 差うつむくを。さしのぞ金「どうしたひとく塞のふ。雪の寒

可憐兒 哉

さに嘗つたか。風でも引アしぬへかの小三。風も些との引ま
 したが。失計での有ません。金「フサ夫とやアいつもの持病の
 癩か。小三「持病や酒の二日酔なら。塞でゐても阿郎のお顔。
 見れば直る。常の事そんなとでござりません。金「ハテれ
 つあとを云もんだの。そしてママと云とる。小三「なんどか
 寧苦に爲て。人にも言れぬ心の苦勞。金「ナニ人お云れぬ苦勞
 が出来た。ハテナ。ハ、アられぢやア大方。昵の客が身受を
 すると云とる。小三「何のママそんなとタマノ何でございま
 へ。金「何たとい。小三「アノ是でござります。ト、いらへゆびを
 して、つづらしと

うあかは金 そんなら留つこのアノ夜喰の塊りダ出来た
 をうくす
 とぬふれか 小三「ハイそれだからモウ。誠お苦勞でなりませ
 ん金「おんのとかと思たにどふでこう云中ぐもの。子の出来
 るのハ覺悟の上。さにも苦にするといねへそうして留つた
 のハ。らつからん小三「モウ三月程になりますヨ 金「そりや
 ア大さう早うつたの。併し身重よなるのらり。いつ迄勤も。
 成めへうら。追つけ春に爲ららどふありと。重兵衛よ懸合て
 都合して勤を引せるのら。必お察するといねへヨ。マアく
 何ハ更も角も。實を結ぶ目出たいことぞ。必祝ひよこれう

ふめつらり。替を呼で酒とせう小三「とい云者のこれから
 の。一チ倍阿郎に御苦ろうを。懸ませうかと夫が今から 金
 苦勞になるとい金計りの苦勞。のまふぬことを案じ立して
 煩つて呉らやア。いかねへせサアく酒ぐと此より常の幫
 間藝者大勢揚て大噪ぎ。酒筵に時や移らん

第四回

爰又。千歳屋の具名鶴ハ妹の小三よ名乗あひてより。力
 になりつなられつして。最睦ままぐ萬の事を語らひて暮せ
 しが。兼て突出しの時分より。さる有徳の商買の。隠居が深

徳不孤

く昵みさつ。何くれとなく。深切に。よく世話を為たりしが。其年の暮真名鶴のかの隠居に受出され向島の邊は樂々と世を送る身と爲にけるされバ月日の過と速にて明る二月の頃には小三いはや五ツ月に爲しうバ座敷へ出れば夜も深る又は無理なる酒も呑む故身の爲に悪かるべしと金五郎の頼儀屋の主に懸各些の手付の金を使いして近き中にて受出す程の夜の座敷へ出さぬ様よとたのみに主重兵衛も流石の粹亦男故早速に承知して。最深切に痛のりけり「あゝ金五郎の。小二を身受の金整へんと様々に思索したりしが。元より

金五何
不以下
實告
其父
如三貞
操小
三者爲
華侯夫
人何
恥
金五又

大金の事なれを。養父文次郎へ。うち明て云べき様も無りしもある。何のいせん左や右に。獨り胸のみ苦めしがやうやうに思索を回らして。京都の父文之丞方へ。私かよ言ひ送りたる。この程三條の小鍛冶宿近の銘作よて。大小の拂物あり。珠に焼刃世に勝れし。わざ物にて其價の。一包どの事なるの元より。両刀の武士のたしあま。何とぞ是を手に入たさま。内々にて右の金子。御かし被下候様にと。只管に懇望の文面もある。文之丞も最ひそうなる。一人の子の望なれば。偽りなりとの露しらす。誠と思へば吾子あから。よと心かけ

何^ソ不^レ三^ニ 以^レ實^ニ 告^ニ文^ニ 之^ニ丞^ニ 父^ノ恩^ヲ如^ク 此^ノ金^ヲ 五^ノ欺^ニ 此^ノ恩^ヲ父^ニ 心^ヲ豈^ニ 不^レ恥^ニ 哉^ト然^レ若^シ

未^ダ頼^ミしく。本^ノ家^ヲを繼^グげども。兩^ノ親^ノの有^ルゆる萬^ノ事^ヲ身^ヲ儘^ニに爲^スて。心^ヲに任^セぬがちよこそあらんと子^ヲを思^フふ。情^ヲある親^ノ心^ニに。故^ニなく百^ノ兩^ノの金^ヲを整^ヘへ爲^ス替^ニにて私^ノらみ金^ノ五^郎の方^ヘ送^ケり。借^モ金^ノ五^郎の藝^者の小^三が只^チあらぬ身^ト爲^シより猶^更に可^カ愛^ヤ彌^増早^ク勤^ヲを引^セんと思^ヘと身^請の金^トのいねば是非^ニなく都^ノの父^ノの方^ヘ刀^ヲ求^ムる金^ナりとして偽^リて書^狀を送^リしかど彼^ノ地^で金^ヲ整^ルふや其^ノさへ當^ニに爲^サれバ兎^ニに角^ニに心安^カらす都^ノの便^リを待^中に次^第に月^重りて小^三の早^此月^方臨^月になりしかバ額^俵屋^ノの重^{兵衛}夫婦^も深^節ある心^{から}欲

以^ニ正^ニ 道^ニ償^ニ 小^三 此^書已^ニ 終^作者^ヲ 以^テ權^ニ 謀^ニ生^ニ 下^篇幾^ノ 多^ク文^ニ 又^是德^也 有^隣者

を離^レて小^三をらうり殊^ニに金^{五郎}の親^元も裕^かなると知^ゆゑよ手^附の金^{を取}し耳^よて殘^の金^のうら取^ねど更^に危^ぶむともなく産^の手^當を何^{くれ}と遺^る方^{なく}賢^ごちて安^産ある祈^{ける}金^{五郎}の斯^までも額^重夫婦^の深^切の一方^ならねば少^{しも}早^く身^請の金^を渡^{たく}思^へと其^も自^由あらず。獨^胸をど苦^しめたる。早^月満^て小^三の玉^の機^{なる}男子^を産^{しか}バ。金^{五郎}は更^{なり}。額^重夫婦^も喜^こぶと大^方ならず。其^名を金^之介^と名^付しが。兩^親に似^て美^くしけれバ金^{五郎}と日^頃に増^て小^三金^之介^の愛^に引^{かれ}兎^角あり。氣^も落^付。

内に居ると稀にまで額重へのみ行ものから白翁の惣領の。
 文之丞が不身持よて。大方ならぬ苦勞をしつれば。秘藏孫
 の金五郎。無頼ものに爲もやせんのと。いらく思ひ居たり
 しに。近頃の外と内。内を外と居付ぬる。初めの様は若者の。
 習とさのみ咎めもせざ。打捨て置ける。漸々増るゆる斯
 て。身の爲悪するべしと。思て或日吾居間に。孫娘のれゆき
 に琴を弾せ。烟草くゆらし聞居るが。させるをはらいて「ユリ
 やれゆたよ。モウ琴もよいにーやれ。此頃の太分上達しなが
 随分身は泌て習ふたがよい。私もおぬしが琴を聞て。大き

老人
口吻

に憂を晴しました。年が寄とおつなもので。外に何も樂がな
 いうら。お念佛でもヤシたり。おぬまが琴や三味線を聞のが
 何よりよいなぐささじや。イヤそれのさうと。アノ金五郎
 の内に居かのト。こいれておゆきい琴のつめ「ハイお兄さん
 の。お部屋にお出遊しました。おんぞ御用でござり升か。白
 ち、さしたる用も無れど。私が今茶を入るから。些話に來い
 と呼んで來やれ。ハイ「ハイく畏まりました。お呼やて參ま
 せうト。琴をかたよせ出て行く。引ちがへて金一チ、金五郎の。
 サアくもつと此方へ來て。茶が出來たりら。一ツ呑みやれ。

自レ是
要ニ小
年子弟
子細讀
去

茶菓子、幸ひ御前から頂戴したのを取である。いつにかいら
さに金五郎も茶そのみつ、白「コレ金五郎。ね主も今が血氣
よもやまのつあしのついで。盛。老人の云より面白ろふ有まいが。ママよふ聞やれおつ
あもので子を思ふの親の常で。貴い賤いの差別の無もの。先
達て何の頃でか有るか。上方うら状の來る時。あちらの一統
風が流行ど。さう云てよこしるもやつぱりたぬしと案じる
故。氣を付て呉どの事て有う。元よりおぬきも獨の親。又兄
弟迎も外になし。勿論文之丞初おぬし迄も。秘まて居な
れど。お龜とやら云容貌よき娘を。親知ずに貰て育てあげ。

何等般
勤何等
慈悲

互に兄弟の様にして。悪からぬ中で有たとや。らそのお龜で
も側に居ら。又まぎれにも成うけれど其とても行方知す。
生死の程も分らぬと。サ。ちらりとおりや聞たぞや。何をい
ふても此方のお雪は。まだ一向の子どもなり。内に居も面白
くあるまいが。今では文之丞もおぬしをバ。此方へ貰ひ受て
からの。お龜もぬ故樂みよ。思ふのコレそち計ぢやから。
悪い耳を聞せぬ様に。せにやならぬが若い中。利發な者で
も些宛の。身過りの出来るもの。最ものや遊きとは。面々
の得手勝手ゆる。暑さ寒さも何とも思ふまいが。また内での

さういふまい。アこの寒いに出で行をつたが。風でも引添ねば
 よいが。夜が深て歸ねを寐て居もろくく。睡られず人の
 足音のそる度々に。歸つたかく。門を閉たで這入られぬの
 かど。引たて耳をして聞てゐるぞや。随分折ふしは附合など
 で。遊びにも行がよしサ。若い中の事なれば。なんでも爲な
 では無けれど。この頃は餘よこらじたぞや。それがつつゝのると
 果々は。モウどうあつても儘の川と身の治りも付ぬやうに。
 なるものだからたまは。内居てみんなけ氣も些とは
 安めるやうにしやれ此位ゐなとは云すとも承知して居で



所謂 テレハ 綿 ヲ 綴 レ 首 ヲ

金五此 時一喜

あろうが。いつらぬやうにしたがふト かたいやうでもど
 する丸あたたまふでついで こやらかさのどい
 いとやわわらう 意見に金五郎の一言半句の返へすと
 もありりし 金一段々の御意見心根に徹しまして。やし上る
 とばもござりません 是迄種々に御苦勞を懸ましよと重々
 身の過まり。ね允しなされて下さりました あやまり入りた
 ゆきひまたも いできたり モシお兄いさまへアノ上方うらお使の
 参ましたヨト聞より金五郎之俟兼たる便に飛び立喜しさを
 知れじと胸に押うくし 金ナニ上方のら人が来さかへトい
 に白翁もさ 「サ、何じや上方から便りが有タ今も今とて浮
 耳たて

一憂喜 ハ 者 ハ 疑 フ 金或来 ニ 一也憂 ル 者 ハ 疑 フ 金或不来 ニ 來也

説をした處早ふ金五郎行て見やれトす いひる 金五郎といろ
 くどまて玄關に立出。使ひあ逢て状うけ取。開きて見れば
 刀をもとむる金一包は使ひのものに持せ使とし候へバ改
 めて受取申すべしと。細々と云送つ、猶其書状の封トの奥
 より。隠居白翁への書簡も出しのバ。その状と白翁の所へ差
 出しりの一封の金を受取。己が部屋に入りて返書を認め。使
 ひの者の歸しけり。金五郎のかの一封の金を得まのバ。飛立
 ばかりに喜こびて。すぐお懐中し。立出んとして中の間を見
 色バ。お雪は猶一心に。人形の着物を縫い居る姿と今年十

四にありければ。萬うちづにして。可憐なく容貌形ちも美しく心づてさへ優しければ。小三にくらべて。劣なるべし

金「コウお雪がう。うれい此間の人形に衣る着物う。どどのれをふくみ。」「ハイ貴兄に頂きました人形のでおざります

金「其はい。がの。己の今出て行から。おぢいさんやお母さんがお聞なすつら。今仲間のら呼に來て参りましたと。い子ごからさう云つてくんなよトいへばおゆきと。」「ハイハイ。」「それでも

金「なせん。そきに笑ふのだ。」「それでもお仲間へお出遊したと申ましてもお歸りのお遅ひと僞ごど

阿雪亦
是甚慧
性

お思ひあそひしませう。金「何は後で。又どふでも。云やうが有からぬ。いな案じせとさうい。あよゆき。」「ハイさやうならお早く。お歸りあそばしました。いふに金五郎は出てゆく

いで。うば「お娘さん何を遊ばし升ゆき。」「これかへ。此の間お兄いさんに頂いた人形の着物だよ。うば「もうい。加減娘さまいじりも遊ばしました。いつまでもそのやうにね。さまをかりかわいがつて。どらした物でございます。今に若旦那さまの奥さまに。おなり遊ばすお年でからに。」「チヤ姥は嫌なとを云だよ。あれいね兄いさんだ者を。其なといな

阿雪言
命下金
五聞上
之金五

りません。さうしてもう何處にか奥様がお出だよ。うば「それだからあのやうに。お内に迎ひ片時も。お出あそばす空はなくそれと云もお前様が。もう些と大人らしくあそばせばよいに。ほんのね、さまで若旦那の女狂をあそばすを。しらぬ顔でお出あそばすから。私しのもう心痒くつてなりませんと云れてお雪の氣の毒そうに顔を赤め猶あをい。ゆき「それでもアノれ兄いさんの。れじいさんや皆さんに誠に。お心づかひを遊ぶすから。お可愛想だ者を。ちつとは保養のお遊を。あそびしてよいではないか。うた「それの又しれ

亦應
断腸



たど。あなたはお家のお娘さま。若旦那さまはお血統でも。多養子でござり升もの。お心づかひもあそばす筈をト。お主れもひき岡焼もち。おゆきはよこ〜「チャ〜そんなとをいふと叱られるよ。上がこの伯父さんの。眞のお宿は爰だから。お父さんよりお兄さんが。大切だと常々からお母さんがおつしやつたよト子供心にも金五郎を。大事にするぞいぢらし〜。却説金五郎の。件の金を携さへて。飛が如に額俵屋へ至りて。主重兵衛に逢て。小三の身の代を。渡して是迄ひどかたならず世話になりしを厚く報ひ。夫より直よ青柳

小三已
落二簀
妓群

橋の邊なる桑川といふ料理屋の裏に家を求。造作迄も奇麗にしてこの屋に小三金之助を引取。乳母をのへ下女を置て住らせけるに。小三のゆへなく。産後すら〜肥立ものら。小三のつく〜行末を。考へ見れの金五郎も。養子の身にてこの身を初め。金之助や乳母下女迄。養育と大抵ならび所詮わが身の落魄で。一旦廓の藝者して。人にも顔を見知れたれば。今さら斯して暮すとも。誰知ぬ者もあければ。女の手わざに墓々しき事も出来ねば。またもとの藝者とあれば馴し事ゆる。このみに。氣骨もをれぬわが三筋の糸の世渡り

一場大 演戯了 以是 更以 妓籍再 掲別 開一 大戲場 是作 者弄 筆處

も。藝の身を助ると。譬の節も金五郎が。せめてい心安めな
りと。思への金五郎へ我胸を。打おけて物語バ。今更一旦う
け出せし。小三をふた、び客へ出さん。人のおもわく世の
誹も。口をしくの思へども。万事心に任ぬる。詮方なくて
承引けれを。小三は是より又元の。かへり花さく唄妓となり
て。客の相手に出し。容貌も勝れ座もちなれば。引手夥
に彌々のやり。内に居る間。無りけり。頃しも霜月の末つり
た。小三の金之助をうさ抱その身も炬燵へ横にあり。出もせ
ぬ乳を含ませて。ねんころくと鼻唄を。うたふて寐かし付

てゐる。そのかたわらに乳母のおちかひ。火鉢に養花を拵ら
へなから金の介の頭巾を縫つて居しやうと。ころへ金五郎の
たるを小さんの「チャ入らつしやいましたり。さぞお寒ひう
ござりましたらう。金五郎「さうよ。何ごのひどく冷のふ。ば
うすめと又ひる寐かとい。ながらはを。巨達へあたりて寐こ
るべバ小さんの片手よて烟草を吸付金五郎が。出しな。小三
もしお前さん。あの廓から最中の貫たのが有ます。アノ
お雪さんよ上まして。悪ふござり升りへ。金「ナニ悪もねへ
が。あんち大きな者あやるよりと。取て置て坊にやるがい。

合多 少妬 言愛 極者

小三「それでもこの子には。あんまり甘つて。悪ふござい升。
 やんに。甘露梅も有ましたら。一所にしておちいさんの所
 へでも上ませうか。金「バウアいひねへ。石部金吉鐵兜と云ふ。
 固い内へ。花街うらもらつゝ者が出される者かなト。いはれ
 とこへ「チホ、はんにろうで有ましたね。それはそうと
 ろづき」アノお雪さんと。さぞれ美しくお爲りなさいましたらうね
 金「さうさ。まんぢらでとねへけれど。まづ一向のね、さま
 なり。どこのか人どくらべてと。逆も及ばねへ論あしよト。びゆ
 のさきで小さんの顔をちよい「又そんな悪らしいとを。夫で
 とつく小さんととらひながら」

もモウ女と云ふ者ハ。子持も成と色氣も無なり。つまらぬ者
 であり升ねへ。金「違へねへ。色氣がきくつても汗氣が有バ澤
 山ごのふば、アト。まるをのくれをうづ。チホ、はんあさ
 やうでござい升。私しのやうに色氣も汗氣も無くなつてい
 いけません。新造さんなどは是うらが肝心でおざい升
 小「チヤいやよ。夫でもおつな者で。子供あかまけると。活智
 あくじいむさくつて。わが身ながら婆々アヒみたと思ふや
 うだよ。夫だら座敷へ出て。お客が皆な私しの事を。子
 持山姥だなんのと云から。私しも夫をうつぱり通して。斯云

金五
只だけ黙もく
聞き之の

唄うたを唄うたつてやるよ「わかいら時ときの二度にどはない」有う頂てん天てん迄まで上のぼりつめて。親おやに苦く勞ろうを懸かはばかよ。子こをもつてゑる親おやの恩おんを深ふかい者もののないわいな」「たとへ金銀きんぎんで富士ふじの山積やまつむども子こにや易かんふれぬ。ほんゑ世よの中に子こはと可愛かわい者ものとない。と唄うたふゆゑ。中なかにひねきなお客きやくの。ためへのやうなものにやア。ろくな子こは出来できやアしめへ。子こと云い者ものの屍ひつを放はなても。でさるのぢやア無なけれと。可愛かわい人ひとと大骨おほいほを折おつて。持もつた子こだから出で來き合あの子こといい些ちつと違ちがひますと云いうら。色氣いろけが無なつてゑ、と云いて

愛之極
昵之極
睦之極

呼よんで下くださるゐら可笑おかしのサ金か「へんごんだ機かりの云い立たた。はんに此頃このころぢやア。めつさう口くち達たつしや者ものに爲なつたよ。道理だうりで己おれもひまくられるト。ひひつ、ねてゐる金之助かんのすけがみ、をひきいなを覺おぼす。小三せうざう「アレ又またそんな戯いたづ計けいかり。とうく起おしてお仕舞しまひなすつた。折角せつかく好寐こうみかし付つけました者ものを金か「ひ、ひああんまり晝寐ひるなをするよ夜よるに爲なつて目を覺めすから。噪なしくつて眠ねれねへ小三せうざう「お前まへさんでゐるまいし金か「ナせく小三せうざう「あせも好出来よくできました。あなたいつでも晝迄ひるまで宛あつてゐる起おなつて宵よッぱりを爲なるものを金か「なんの強おとに起おしてもも

うね倦々時分だらうら。アレ機嫌のい、事さ見な。おれが顔を
 見ちやアにこくく笑ふせ。い、子かくい、坊ちやんごぞ
 ト金之助の顔こりや。おつかアの様。浮氣に爲ちやアいか
 をあで、小三「チヤ芥辛ねへ。私しよりああたよ似たら。親に
 ねへぞ。世話計り焼ませうトろのかたをむらて。お竹や何をきて居
 か坊が起たから些と抱てお呉よ。下女「ハイくサアノ、お
 坊さんお出てなさいまし。アノ乳母さん。私やア今お坊さ
 んを。連申て惠迎院へ行て遊せますから。アノ齒入やが來
 ら。あがしの下駄の齒を入させて。おくんなさいよ。うね「ア

イく其のい、ご。お泣なすつたら早くお歸りよ。ね怪我を
 させ申さねへ様におしよ。下女「アイそんなら行て參ませう
 トお竹のそとへ出て行引ちがへて女りも。小三「チヤおたば
 ゆひあらひがみのおたが來るを見て。さん丁度よい間ごよサアお上り。坊を今遊に出したからこ
 の間に一寸と結てお呉な。たば「それの丁度よふござい升ね。
 チヤ旦那れ出なさいまし。この間の間ちがひまして。さつを
 りお目に懸ません金。「ほんにさうサ。なんごか急に寒あつた
 ね。モウこんな炬達と首つ引を。するやうになつちやアい
 けねへのサ。チヤおまゐるさん。そんなとをおつしやるが

炬達と云者の能もので。云ふよ云われぬ樂しみが有升よね
 へ小三さん 小三「なんぐねおたがさん。おつな事をお云であ
 い人の鼻を摩やうな私しらアそんなとの嫌サ 金「ユウおた
 ぼさん。お前も餘程好物家ぐね成程一寸いちやつくには。
 まんざら悪くねへやつと冬の色事は炬達で出来るやつが。
 いくらも有ものさ 小三「もしれかしくもないそんな話と。も
 うおよしなさい氣障で有まさはね。サアおたぼさん。今よ煮
 花夕出來から其内結てくれあねへト 小三のこみをもひ
 なが たが 小三さん昨日はアノどこへ出あすつへ 小三

又タ是レ 愛極テ 生妬レ
 何等 妙答

昨日きのうへ。きのふは舟で酉の町へ行はね。夫おれぐからいつも
 より髪かみがごいなしに成たのサ 金「ナニきのふと舟へ行たか
 ら髪かみがふはれたと。うらつはちと怪あやしら 小三「チヤ〜旦那だんなの
 何かおつしやるよ 小三「又妬またやが初はりさ。珍めづしくございません
 金「あれが妬やけへでどうするもの。番人のねへ生巢いけすだもの。ど
 んき人が釣つかしれやアしねへ 小三「チヤとんだ冤いけすを受るも
 んぐ。ことへこんな釣人があつて。餌魚えいぎょをどんくまけばと
 て。曲まつた針はりにやアのりませんよ。憚おそりながら私わたくし 金
 へん。とんだ所ところでりさむやつよ。あかるが芝居しやいをするやうに

トからまつてゐるうち 小三「バアやアお茶のまじ出来ぬう
 トかみをゆひしまひ
 へうバ「ハイやうく出来ましよ 小三「そんなら一ツ上やう
 ト 金五郎のつをとりて おたば「是は憚りさまモウぬりま
 トよがよもついで出す
 いなさい升な。やんに旦那へ此頃このころに顔見せのとうでござり
 升金「私も此間このあたりからさういつてゐるのサ。小三も見てへと言
 うら一所いちしょにね出な四五日の中よ たが「夫の有あやのうござい
 升。樂たのしみに致いたして居ますよト わかひもの入り來り
 小三さんへこのぢうのお留守居衆るすゐしゆが。夕方ゆふかた行から口くちを懸かけて。
 置おきて呉くたると言いつてめへりましたよ 小三「チャさうかへ。けふの

お店たなの衆しゆの約束やくそくも有あるが。こつちの夜よが更よけるからとはつて。お
 前まへの方ほうへ參まゐらうよ ぢうい者「そんなら後刻のちほど湯案内あんないを致いたしませ
 うト わかひものり たが「どれ私わたくししめ參まゐりませう。さやうな
 ら小三さん。又明日またあしたト挨拶あいさつして髪かみゆひおたがの歸かへりけり

第五回

小三こさんの桑川くまがわより口くちが懸かしゆる鏡臺かがりだい取出とり身みじまひの。紅粉べんぷ
 おしろひも深ふかくいせず一寸化粧ちよつとけいせいて 櫛くし并なら前まへのし一本ほん後うしろへ
 の銀ぎんの細ほそうち計はかり挿さして生氣せいき作つくりのいやみなし金五郎きんごろうの手枕てまくら
 して。こたつにあぶり眠入ねいりし様子やうすに。小三こさんと戸棚とだちよりかいま

此邊 勿ニ輕 々讀 過スル他 時必 有ニ應 照

さ出しろつとかけて枕をめてがひ。そこら片付金五郎の羽織を疊で戸棚へ仕舞。火鉢の傍へすわり煙草を一ふくのみ。傍よある淨るり本を手に取あげ讀ながら乳母と話し小三コウバアやよ。こんちとを言たら又。つまらぬ事と笑ふだらうがの。氷の流と人の行末程。定め無者はないよ。此淨るり本の三勝を見る様も私の身の上。よく似て居かもしひよつと浮世の義理にからめられ。どんち別にならふも知すマアさう爲らうどうしやうと外に苦勞はないけれど。それ計りが案じられて人の知らぬ胸を痛めるよ。身の行すへをくりかへし不ろり

此乳母 甚忠

とおとす一トしづくうらぶ「アレ又してもく。そんな益をどとばかり打けて。にもたぬ事を。おつしやるものでござりません其三勝の身の上。それはほんの戯作もの今時縁切だの何ののと芝居。おやれ本では有まいしどうして。そんなとが有まぬものか。さわいなもない事許うりト。いひまぎらせを其あみおろ。「ほんにさういへばそんな物作物としり宛も身に比されて縲言云も。やつをり女の淺とか故。金坊と云子迄ある者を多本妻には爲れずとも末の末まで添透やうと思ひないでさんとせう若ものことが有たらば夫の又その時のとも

此邊 勿レ輕 々 讀 過スル他 時必 有ニ應 照

と出しろつとかけて枕をあてがひ。そこら片付金五郎の羽織を疊で戸棚へ仕舞。火鉢の傍へすわり煙草を一ふくのみ。傍よある淨るり本を手に取あげ讀ながら乳母と話し。小二「コウバアやよ。こんちとを言たら又。つまらぬ事と笑ふだらうがの。床の流と人の行末程。定め無者はないよ。此淨るり本の三勝を見る様私わたくしの身の上うへ。よく似て居かもしひよつと浮世の義理ぎりにからめられ。どんち別わかにならふも知すママさう爲ならうとどうしやうと外ほかに苦勞くろうはないけれど。それ計りせりが案あんじられて人の知らぬ胸むねを痛めるよト 身みの行すへをくりかへしるるり

此乳母 甚忠

とおとす一トしづくうらぶ「アレ又してもく。そんな益えきをもとそバから打うけて にもたぬ事を。おつしやるものでござりません其三勝そのさんかつの身の上うへ。それはほんの戯作ついでもの今時縁切いまときえんぎりだの何なんのかのと芝居しばいり。おやれ本ほんでは有あまいしとらうして。そんなとが有あまはものか。さわいもない事許ことごとりト 小こさんもむねをなでおろ 「ほんにさういへばそんな物作物ものつくりのものとしり宛ついでも身みに比ひされて縁言えんご云いも。やつをり女の淺あはとか故ゆゑ。金坊きんぼうと云子いよこ迄まである者ものを多おほ本妻ほんさいには爲なれずとも末すえの末すえまで添そひ透とけやうと思おもひないでさんとせう若わものことことが有あたらバ夫おつ又またその時ときのとも

うしく案じまいくついなしなりバへ糸川より小三「ろん
 むかひの人かきたるにぞ
 ならバアやア。行で来るから氣を付けてお呉よト 出か、やん
 にアノ坊が。歸つて私が居なかりたら又ね父さんをお願いる
 だらうか？アノはいちやうにうづら焼が有りら。あれをや
 つてだましておくれ私しも又歸に。あんどお土産を買て來
 るから。そして若旦那が。目が覺た。大方お茶漬を上らう
 くら。鍋焼でも取て上てお呉ト 萬事に氣くぱりぬけ目あき
 女房か。ぎどあらはれける
 斯まで夫やわが子を。大事懸る心の。坐し。へ出ても
 とに角に内の事のみ案じらるれと。勤といふ字の是非無く

もいやな客よも機嫌とる。心の中ぞつ々からめ。斯て小三金
 五郎は。金の助の愛に溺れ。他事なく暮すその年も。暮
 て又来る春霞。舞く空もうら、かゝる彌生中バの事なるが。金
 五郎と仲間者に誘れて。向ふが岡の花見もどりのゆる酔
 に。皆々舟に打乗て。青柳橋まで來りしが。此より上りて金
 五郎ハ。人々に別れて可助と云。供の男を引連て糸川の前
 へ來れバ。乳母は金之助を抱つ。斯と見るより遠くのら
 ン「チャヤ」お坊さん。アレお父さんが入らつしやいました
 よ 金五郎「ナ、坊か。バリアに抱こまてい、のよ。お母アは

如見

内にかへらば「ハイお宿でおどりますサアお坊さん。お父さんにおじぎとへ。へい御機嫌よふと。チホ、ハ、ハ、ハ。イエ、お父さんにだつこと為ません。まう眞暗に赤り升のら。お寮んねがよふござい升 金五郎「金坊やお父さんはお母さんの所へ行てお乳を呑よ。あせくござよト 金の助「お父ちやんいや〜。お母ちやんの乳いや〜」「チャさやう〜お母さんのお乳はお坊さんの。お父さんのでとござりませんねへ。お父さんと御機嫌もあるおしらしなすつていけません 金五郎「ハ、ハ、ハ、坊やのバかや〜」

「らりひながら内へゆき見

餘醉狀
寫來妙

れい小 今座敷より歸りしま、三味線管に寄りか、り物思ひしげなる顔付に 金五郎「そこ小さんどうぞしこのり。おつな顔をして居のふト 小三「い、へ、さうも致せんが 今座敷より歸りましたのサ。そしてあな〜い。このお販りでござり升へ 金「ナニおれが拙者めい今日仲間者の付合にて無據ろさく向ふ島へ御遊覽と出懸て鯛七へ押りけた處が女子どもが大勢で、ソレお手をどれ足を取と。めつたむせうよそやしたて。それからあんでも六酒盛。献酬への唄へや彈や 小三「ぢやて迷ふて。まよふてぢやて。くせ

つも千話も屏風の外へいふり出したる一ツ夜着「いやし
 つさおせし堀までつける後の野ときき。山とみれ。床と
 つたらねてかへれ雨降たら居續だ。など、唄からたまらぬ
 て小三「道理こうママさつい御機げん。それいさうと。あ
 たい京を御立の時。お父さんのおつしやつた事と覺へて御
 出あそむえ升かへ。金「是は又改まつたお尋ね親父の教を守
 ればまそ外の女よ目も振す只た一人を守つて居るうら何
 もいやれ案じなさるといふごさなく候サ小三「チホ、。そ
 の思召しなら嬉いけれと今でい日陰のこの身故。おちいさ

多情多
 恨金五
 小三通
 身皆是
 情根恨
 種

んや皆さんが。此様なとどの御存じあく只郎君が我儘で。
 放蕩をあそび事と思召すでござりませううら。お宿のれ
 首尾がお大事故。あんまり御酒を上まはと郎のた爲になり
 まはまにかと其が苦勞でなりませんと 思ひにあまるしと心
 に悪くともいねど一盃さげんの金五郎「ア、百も承知二百
 も台點。お爲こりし其意見聞度もねへ耳が汚る酒をあん
 まり上まさと郎のお爲にありませういッ。へン酒を呑ふが
 呑めへが。おれが口だから勝手だよ。よ大きにお世話お茶で
 も上れッ。そんな理窟らしい意見を云のい。大方外におつり

讀者
有_二何
感_一想



さなのおもしろれへ話でも有_二のらだらう小三「チャ久_一しい者で
 有_二ますよ金「ナニ久_一しい昵がある_二とそれだから何_一の何のど
 云て早_一く歸_二さうと思_一ふのぶな良々_二とんぢよ邪_一摩_二に爲_一なら
 歸_二つてやらう留_一なトぢれるうんしまくはいふさへさせる_二と
 おもへ_二の_一のざとそお腹_二が立_一つ_二あらどうでもあさい偶_一々はお
 早_一くれ歸_二あさるも御_一孝_二行_一でござりませうチャ。なんぶ_二り風_一
 の變_二つたやうだ。ア、雨_一が降_二ねばよいグト。さからいぬゆる
 金五郎とさせるをしま「ナニ御_一孝_二行_一でござりませうお香_二々
 てお茶_一漬_二が聞_一て呆_二れらア雨_一が降_二ふが降_一めへが飯_二るお四_一も五

も入る者々トも酒のわざ。我儘氣まゝを云散し。ぢれつゝ
 内へ歸けり乳母の此の時金之助を連れて歸りりりれど金五
 郎が不機嫌故に次ぎの間にて遊ばせて居たりしが漸々こな
 たへ出来り。う。バ。「御新造様へ今日のお父様の御機嫌。お
 悪ございましたねへ何のお腹立であの様に。お發りなすつ
 たのでござりますすへトいへい小さんは「ナニサ何時でもわ
 ざりませ御酒を上るとなんごの彼だのと私しに無理計り
 おしつやるのサ。たまの早くれ歸し申さない。あなたも
 いろく譯あるお身ゆる。れやぞの御首尾が大事ごからさ。

眞情溢
ニ紙背

斷腸々々

お内での心使もなざるだらうし。私よわがまゝの。云所だ
 とお思ひなすつて。いつでもくあの通り。其に此頃で日
 む増て段々御酒が上るから眞に苦勞でならないよ。私
 何と云れても。常から御氣性を知つて居故。御酒を上げて御
 嫌の時。その氣で居からよいけれど。矢張お雪さんみもわ
 の通り。無理ばつかりたつしやるかど。影乍らそれが案じ
 られるよ。私も女の情だもの。いとしと思ふお方を。強く
 云てお歸申すも。浮世の義理や二ツよ。お身のためを思ふ
 ゆゑ。心にも無事などを云出すまでの胸の苦辛。推察して

トなみだぐむらをもさこ
 うば「御尤でござります。譬も云
 と目をしばたさき
 通り。一ツ叶へを又二ツど。何を云ても任ぬ浮世。十分な事
 いござりませぬもの。色く御苦勞あそむすも。因念とやら
 でござりませうト しめりかちなるいあしなりをへ 「チイお
 くめ川のりやうりばん表より
 竹殿一寸と爰を開てくんな 下女「アイく佐介さんかへト
 しやうじわけれを佐介のひろぶたへい 「モシ旦那のどうな
 ろく酒のさかなをのせもちこみて 「モシ旦那のどうな
 さいました 小三「チャ佐介さん旦那はもうれ歸りだよ。佐介
 「ホイそいつの大縮尻。けふのあせ早くお歸なすつた子。さ
 つきお出なすつたのを見届けたから。折角。くめんすめんし

て旦那のお好な一ト口者を仕込で持てめへつたのに 小三
 チャさうのへそれのママよく忙しいのに。氣を付てお呉た
 嬉い子 佐「何よしても旦那が。お出なさらね「ちヤアのじま
 らねへ。そんなら此鉢の者や何かい。旦那への心さしたのら
 置てめへりませうト さか赤を置いて 扱も金五郎の。酒が云は
 る瘡癩の。腹立まざれ咎も無。小三に強く當散して歸しが。
 根もあま口説の事なれど。又逢ねば氣に爲ゆる。四五日立て
 晝過頃。小三の許へ至しに。小三の留守にて乳母許り針仕事
 ゐたり「チャ若旦那さま。此程の眞にくみ遠くしうござ
 しが

金五不
逢ニ小
三二僅
數日然

り升 金五郎「さうサ。此間の些と用が多かつて。さうバも出
られぬへやつようバ」アノあまたがいつぞ此間ね腹をお立
あそばして。お歸なすつたから御新造様が。具にお案なす
伺てお出まさりませす 金「ハハハハさうだつらうの。おれはさ
つぱり知らなんだ。アノ今日はどこへぞ行らう 金「ハハハ今
日は鮫清に。なんとやらの會がござりまして 金「フウ坊のと
うしう 金「お坊さんの今お竹がどこへかお運申て参まし
た 金「さうり。口を忘りしぬへのふ 金「チヤ飛だ事をお
つしやいませす。三日や四日お出なさらぬとてお忘れな

其心
如三千
秋不
相見
以是
於金
之介
亦有
其情

る者でございませうか。今朝杯もいつそお父ちやんくど
あなたの事をまつしやいました 金「ハハハ。子供と云者のど
ぶも悪ねへ者だの。アノ此間来た時。一寸頭へ吹出がした様
だつけが。そんなに加もしねへかへう 金「ハハハお頭のでござ
りますかへ。その様にふぬもなさりません。それいさうと若
旦那様へ。こんな事ハやす迄もござりませんが。御新造様が
明ても暮ても。あなたの事耳お案なすつて。夫ハハ御苦勞
の安まる間迎へござりませんから。その御心根を思やつて。
あなたも何ぞあんまりお氣を。お揉せあそばさぬ様にす

つて下さりましたし金「イヤモウおれとても悪と思ふ小三で
 なし殊に子まで出来たのに。少いおれの手助と。嫌な坐敷
 の勤をするゆい。並大抵の女杯の中々及む心立と思へを
 一日片時も勤をさせる氣のねへの。足のぬがち故是非もな
 く。苦勞をさせるが可愛そうだとほろりとおどす男泣う折
 から榮川の若者清介料理ばん佐介入り来りて「へい旦那此
 間の金「チイ清介に佐介公か。さア上んねへ 兩人「へい御免
 なせへトふたりながら清「若旦那此間のねから入らつしや
 いませんね。さついい見限り。又外に何か面白い。世界でも

出来ましたり金「飛ぶ事を云面白い世界處り。いつも老實で
 さへねへやつよ。些と面白の世界へ案内してもらいてへの
 清「是の又迷惑千萬。ハ、ハ、ハ、佐「旦那この間子。ああなたが
 お出なすつたのを見届まして。一寸びり趣向してめへりま
 しろら。もう後のお祭りで。大きに鼻が明ましたのさ 金「ハ
 、アさうぶつつか。そいつア残念ぶつつかの。併しその心意氣
 がありがてへそんなら今から始めやうト 是よりいろく大
 酒もりとあるま、に互に献酬へつして。いと賑しくまりに
 けり 金五郎「どこの間のハ 金「さんと清公や佐介公さんぞ
 しらによりかりりて

つ。うつもく忙しそがしいうら女おんなの所ところへ行い暇ひまの有あめへのふ清「サア
 。そこがもしおつなもので。是これでも随ま分ぶん女おんなゆゑにやア。禰ね應おう
 に謀つかりごと斗たも致いたますのサ。ます女おんな逢あふといふ晚ばんにやア。内うちと
 都合つがひして早はやく引きひげ。ね嗜たしなみの藏くら次じ裳さきを。引ひかけの親おや方かたの目め
 を忍しのび足あし。こそくくど抜ぬ懸けの。逸いち足あし出だして阿あ多た氣けへ押おか
 け。ろじ四よッ限かりも目めに懸かけず。打たち起おこして上ありの天てん神じん。サア夫お
 ちらが口く舌せつの魂こん丹たん。面おも白しろ狸ねこの腹はらつ、みトのりぢでいなす。座ざ
 敷しきをしまひ歸かへり來くる。小お三さんの後あとより。箱はこ廻まわしの仁に介すけ三さん味み線せん箱はこ
 を脊せ負おひ打うち燈あかりを片かた手てに引ひ提ひ俱きをして來くる。小お三さんの上うへへあ「仁に介すけ
 仁に介すけ「へい是これの有あがたふございます。左ひだり様さまなり明日あした。へいお

とん大おほきに御ご苦く勞らうとんなら。まゝ明日あした來きてね呉くれトおびには
 を出だ去し紙しおち「サア是これで一ひとッ香のんでお寐ねよトわたせば箱はこまど
 よどひねつて。仁に介すけ「へい是これの有あがたふございます。左ひだり様さまなり明日あした。へいお
 休やすなさいましたト。三さん味みせんば歸かへり行い小お三さんの金かね五ご郎らうの傍そばへすわ
 り小お三さん「サアよくお出いでなすつて下くださいました。此この間あひだいなせさ
 つぱり。お出いできならませんへトかはを見てうれうれ金かね「へんあ
 んまり能よくも來こねへのよ。來くるなど云いうら來こきに居ゐれば。其またのら
 ひのう呆あはれるのふ。四五よ日ひ己おれが來こなりつたから。五ご月げつ蠅はちく
 つてよかつら。あんまり邪よ魔まよ爲なるから。呼よびにこす迄まで

此 一 言 小 三 心 中 多 少 怨 恨 一 掃 去 如 晴 天 日

ふつゝりもう。來めへと思て斷念て居たが。逢すに行で。や。や。や。なくつて逢せに居ると氣になる。顔が見た。よ。終。う。の。く。矢。張。り。迷。つ。て。又。こ。へ。へ。小三「チヤをからしい。なん。で。あり。ま。そ。へ。清。ど。ん。や。佐。介。ど。ん。が。聞。て。居。の。に。そ。ん。な。事。を。金。ハ。テ。人。が。聞。て。も。大。事。な。い。て。の。コ。ウ。小。三。こ。ん。な。馬。鹿。に。や。ア。誰。が。爲。ら。う。お。れ。も。生。れ。付。是。程。の。阿。房。で。ハ。無。つ。た。つ。け。の。ふ。佐。介。公。揚。貴。妃。や。玉。も。の。前。の。例。も。あ。る。の。ら。さ。の。み。羞。し。い。と。も。思。い。ね。へ。の。佐。介「こ。り。や。ア。且。那。の。夕。御。尤。だ。惚。て。も。り。き。む。の。い。や。不。の。至。サ。小。三。さ。ん。は。矢。張。お。ぼ。こ。氣。が。抜。ま。せ。ん。ね。金」



なんのくくお不と所ところの。不へんららが變へんして古ふる狸たぬきどなりの爲ために息いきどど。ア
 化まがされるくくと。知しり宛ついで矢張やがら化まがされるい。己おれが一生いっしやうの過あやまり
 だ。小三こさん「チャ宜よろしく敷敷申まをておくんささい。郎君あなただとわたくし社私しゃしをお化まがしなす
 つこのでございます。金かね「そりやア又またなせど。小三こさん「それでも唄うた
 にも歌うたふ通とほり。心こころがふとして古郷こきやうを離はなれ知しぬ此地このちで苦勞くろうする
 とい。能私よくわたくしの身みの上うへに。叶かなつた唄うたでございますよ。清介せいけい「モシ
 ト小三こさん「苦勞くろうするのもおまのんを便たよりそれそれに邪見じやけんな事計じかひ「モ
 シ旦那だんな。小三こさんの心こころい此歌このうたの文句ぶんくの通とほてござりますよね
 へ小三こさんさん。一ひとツ心こころ意氣いきが承うけたまりてへもんでござりせず子

斷腰一
 曲想夫
 婦

小三こさん「なんだねおかまむすめくもない。娘子供むすめぢやア有あまいし。心こころ
 意氣いきなんぞの厭いやごのね。佐介さけい「そんな事ことをお云うなさらせと。一ひと
 寸つそ一ひとツおやんまませへ「ソレそれどらいつどらくくなだへこ。ちや
 らく。どんぶり鉢はちアういたく。金かね「ア、噪やうしい何なにを云うのど
 佐介さけい「ハア、。サア、。小三こさんさんサア一ひとツトといいられて小三こさんの
 の間まにある三味さんまいうた。「なままなま中なか惚ぼたがうらみ惚ぼざ苦勞くろう
 せん手てあととり。もせまいもの。清せい「ハ。妙めうだくく。小三こさん「モウ是これで堪忍かんじん
 してお呉くれ金かね「ユウおつなものでの。己おれも實じつの上方うみかたせせろくど
 づ。都みやこと云いハ聞きぬが美いが上方うみかたせせいろく上方うみかた猿さると云いれてい

句もねへのさ 佐介「その上方にもお前さんの様な通人があ
りやすうら東ッ子の一句も出ません。全体ハ旦那がわりい
のさ。ね前さんがあんまり程が美から。やばなら斯しゝ憂目
いせまいと。小三さんが此くで。氣が揉でござへませうと
ひたいにつの、金「そんな口舌ハ昔の事よコウ夫よりやア
ハへるまねする 清公今の阿多氣の物語の二番目狂言をはなさねへか。後學
の爲よ聞てへのふ 清「ナニもう跡ハ話ますめへ 金五郎「なせ
清「小三さんに叱れます 小三「清どん何ぞへ面白い話かへ 清
「なアにわめちが色の戀話とトいふどころへ 清介どん佐介
くめ川の少女

どんお客が有よチ 佐介「ナイくそいつハ斯してハ居れね
へ 金「小三とまにある紙入と清公にやつてくんぞ。そして此
一ツ提は。佐介費公に譲てやろうト ふたりに 兩人「へイ是
は有がだらござり升ト ながら 出て行 金「ア、酔た〜。ら
ふハ何したか誠ハ酔たト そのまゝとこへうちふきて 小三「
お竹やまッ茲を片付てお呉よ 下女「ハイくもう宜しうご
ざい升かへ 小三「ア、いゝのさ。乳母や今夜と若旦那は。餘
程わがつたのへうば「ん、へ。そんなよお過し遊バした様子
でもござりませんが。一躰御酒がお弱かッ 小三「さうサ全躰

上りのなさらなんどが近頃の能あがるよ うば「さやうでござい升。若旦那様もお宿でり。萬事思召す様よもいかず。お心仕ひもあろばし升かちつとづ、御酒を上らすは。お氣の晴やうがござり升まい。ほんよお坊さんもよくお眠りの。若旦那のね床を延ませうう 小三「そんなら其子を私が抱て居やうから。お床をとつて上げてね呉ト。金之助を抱擧るにぞ。乳母の此内六疊の度敷へ床をとり夜着を出して うづ「モシ若旦那様へサア。お臥ましたゆりおこ 金「ナイく。ア、い、心持ぶぞト 上着をぬぎ 下着計ふありて 床へ金「サア入り

親睦 至乎 此

一讀絶 倒

ね母アも寐ねへか。坊主のねれが抱て寐よう 小三「郎が抱てお臥たら。それこそ壓してお仕舞なさるだらう 金五郎「い、いな。壓しても己の子だから。誰も何共云人のねへ。方一ねれが壓したら又い、のを拵へるはト 金之助の手を 小三「好きな事をおつしやるよ。アレお止なさい。そんなに引ると目を覺ます。起しちやア悪うござります 金「ナニ起しやアしねへ一寸と貸て呉ト 小三「ひりに金之助をぶ 寐坊主だぞ。コノちつと目を覺して遊ばねへかこちよくト 小三「ア、くすぐりそ 小三「ア、レお止なさいと云のに。寐る先よ立て起しちやアいけませ

餘味鼻々

んよ金「ハ、ハ、ハ、そんなら乳母の處へ行って寐ろ。今日を覺して泣出すと。おつかアの河のか邪魔もあるそうだ。ねたま、よわた、乳母の金之助をかき抱きて。次の間に入りてうち臥しける

第六回

小三の乳母や下女を臥しめ。行燈の側に兀然と獨何やら物案じの。顔打眺め金五郎「コウ小三何をして居のだ。おせ寐ねへ。又持病でも起つたかト、どいれて小三「イ、エ持病でいありませんが。つくづく思回し升と。郎の事が苦勞に爲て

金五郎「なせ己がどうした小三「元よりお好で無つた御酒を

此頃の様よあひりますから。切々夫が私し、金五郎「フウ

分つゝおれがあんまり。酒を呑たり身持の悪いから。行末越

方を思ひ回ひども。こまらねへ者ごと愛相が盡て。夫が苦勞に

なるのだらう。ウ、そうぶろう。いやに爲たらぬやだと

云己も男、切てやる。小三「ソレんな無理をおつまやる

うら夫が苦勞で片時も。氣の安じ間ひとござりません。大方お

宿のお雪さんおもやつをり御無理をおつしやりませうが。

夫でい悪ふござります。金「あんの事たおろしくもねへ。そん

なつまらぬへ事を案ずとサアもふ寐ねへか寐るがし、ト手
 のバしひ 小三「アレまご著物も著換ませんよ金「し、いな。
 さよせる 著物のそれでも大事ねへトいひつゝ、帯を解ハ嬉しけに上著
 を脱。下著の儘に寄添て顔み合せて 互にこり 金「コレ小三
 其方も兼て知る通り。心に染ぬお雪の事。とや斯内で云ゆに
 に。のつ引ならぬ義理詰で澁々請ハ受たれと。松に櫻ハ見換
 られずそきたふ勝つた花があるうか。必ずこれを苦おしね
 へがら、併し親を捨兩刀を捨て。矢立を挿て町人お成ふと
 思へバ。しも二もねへ心安ひ世界ごのふ 小三「サア夫ごいや

はに苦勞になります。只郎君が全ふ。お宿のお首尾の宜様
 にお雪さんともれ中よく皆様に御安堵させて。私をも見棄
 てさへ下さらぬをどの様な切ない苦勞も少まも厭ひないた
 しませんと 小三「しんじつ見ぬし女のみさ 金「おれもその實ご、
 ろを見扱たもゑに。世間晴て。内へ入れてへと思ふけれど何
 を云ても養子の悲しみ。昔の身なぐいさくさなしよ。おつけ
 晴れて夫婦だが却つて今の身の上。思ひ回 ぱつまらぬへ
 トぐちちきりどく ア、おれとした事が。終胸に思つて居故。
 りりへせしが 女の横赤愚痴バつうり儘お成のもならぬのみ 皆な約束爲方

不^レ治^レ本^レ末^レ何^レ止^レ

ぐねへ。是も浮よだぎふなる者かのふ小三。床へ這入て又い
夢でも結ふト。ぐつと引よせ。何成事や契ららん。在斯程に。
隠居白翁ハ金五郎が日に増放蕩加りて。家に迎ひ居らざる
故養父文次郎初め家内の者に。一倍氣兼をしたりしが。お雪
も早十五もも成たれば金五郎と婚姻を結ばんに。少し
足も止らんと。頻まま定を勧めしかば。金五郎ハ心ならずも。
婚禮ハしつれ共。お雪ハ未年も行せ殊に手の無おが氣な
れば。とに角面白うらぬもる様々あしらへたまして。小三
が許へのみ通ふ者から早くも二年計り立とも。猶不身持の

良策
々々

止ざりけり。隠居白翁ハ是を愁ひ。文次郎夫婦もお雪の仕方
の。悪あゆるる金五郎が。内に居付ぬと口には云を。心に眞
實吾子の可愛さに。金五郎に愛相やつさん。我有うちの善悪
とも金五郎の爲を思へとも。幾程もなく吾齡ハ。果にし後や
何成らんと。老の心を痛つ。思ひ餘りて手を回し。小さん
の名所聞たし。心の中を探し上。理を説て縁切らせ。事
寄ハ金を出し。支度して何方へありとも。片付やらんと思案
しつ。金五郎が當番にて。詰所へ出て留守の日に。小三が許
へぞ尋ね行ぬ。頃しも文月上旬。小三ハいでな中形の。ゆ

形かたは藤色ふじいろの裏襟うらえりかけ。黒くろ繻子すずめの帯おびしどけなく。洗しらひ髪かみを後しろへさげ。椽側えんがわへ出て金かねの助すけの腹懸はらかけを縫ぬいて居ゐたりける。折柄表せしかたおもてに人ひとありてたのむくくと案内あんないをたふよ。小三せうさんのハイと應こたへつ立出たしだれバ隠かく。卒爾そつじながら小三せうさんどの、お宿やどの爰こゝでござり升あが居ゐ白翁はくおうが。一卒爾そつじながら小三せうさんどの、お宿やどの爰こゝでござり升あがかな。小三せうさん「ハイその小三せうさんの私わたくししでござりますが。あなたに終つひに見みられぬお方かたどちらから。御出ごいできされました。白翁はくおう「ハアそんならこなた様さまが小三せうさんどのか。私わたくしのこなた様に些内ちない々咄はなしが有ありて態々わざわざ來きました。許ゆるさつしやれと上あへあがればら小三せうさん「何なにのともあれその端近はしぢか。ママ〜こちらへお通とおりさすら

讀者
應シ握
汗チ

ましと奥おくへ通とおせば座白ざはく「扱さてこささまの名なの兼かねてより。聞きて居ゐれと逢あふつゝのじめて。わしの金五郎きんごろうの祖父ぢい白翁はくおうと云いものでござるが。今日けふわざ〜來きましたのも。外ほかの事ことでもござらぬが。アノ孫まごの金五郎きんごろうめが事こと。イヤもう見みる影かげもないあの様やうな者ものを。よふママ可愛かあひがつてやつてくださる。眞身まゐらに取とりて喜うれしい共ともか。んじけな。共とも。禮れいの詞ことばは盡つきませぬ。その深切しんせつな心こゝろろを見込みこんで。些ち頼たのむ事ことがござるト。聞きより小三せうさんの胸むねに釘くぎ。いつと心に當感あたひし。何なにがのせんと思おもひしが。今更いまさら愕おどろく事ことにもあらず。兼かねての覺期かくきの茲こゝぞとおもひ。胸むねなで下くだし氣きを取直とれし

眞身 云々 甚有 含蓄 何小 三義 父白 翁子 也

茶烟草盆を出しつゝ、しどろかに「三」はんに私しも若旦那様のお咄しにて毎々うら。御噂を承りましたあなたのお事。お目あかゝりますすの初めていござりますれど。眞身の親よ防れまゝ。うれまうござります。よふママお出あそばしましたトいふり不つく白翁「イヤ餘り能も参らぬて。ア、物越といひ取まひし。容貌まで高位の。奥方とても耻かしからぬ。人よすぐれた生つき。何なる人の身の果か。見れば見るやど美しくし。ア、若い者の迷ふの最ともかい。こなさんを入れたなら、孫めが尻も落付であらうけれど。上へ

老人口 吻殷々 勤々

の聞え世間の思ひく。義理と人目の詮方など。頼みと云ひ茲の事。知つてゐるかい知ぬとも。金五郎のわしが爲に。物領むすこの一人孫。世が世であるから。無理我儘も仕次第だが。段々深いやうすたあつて。あれが親の家出なし。其弟が今での家督。その養子となりし金五郎。垢の他人と云でいなければ。養子と名の付悲しい。思ふに任せぬ世間の人目。家の娘のお雪と云るを。娶合せねばならぬ。金五郎もふせうく。やうやく此頃婚禮しても。れ雪のまた子供同然で。面白から片時も。内に居付ぬの最もまだ。わしが孫で云で

ないが。世けんの人に賞られて。夫ほどの事わきまへぬや
 うな。氣性でもなかつたが。今に夜泊りのきは止す。女房の
 はんの巢守同様。それ誰ゆるこなさんゆる。わしが命のあ
 る中。内々の者もわしにめんじて。金五郎が悪といひね
 ども。見らるゝ通りわしも老人。今をも知ぬ身の上ゆる。吾
 さま後の金五郎の身の爲よ。ならぬともあらうかと。案じ過
 せば夜の間も寐られず。苦勞で壽命も縮まるやうじや。こん
 な事云たら鬼ども蛇とも慈悲なさん。のな心と思つしや
 らうが眞實われを悪くもなく。内の様のお雪の中に。子ど

